
白球ラブソディ

卯堂 成隆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白球ラブソディ

【Nコード】

N2808P

【作者名】

卯堂 成隆

【あらすじ】

むかしむかしある国でドラゴンが倒されたとき、男が全て魔族になってしまうという恐ろしい呪いが発生しました。

魔族となった男は、種が違うために人間の女との間に子供を作ることができません。

このままでは、人類が滅びてしまう！

そこで神様は男と女で野球対決をし、その野球にかける情熱の力によって奇跡を授けることを思いついたのです。

その奇跡は、試合に負けたチームの選手を2年間の間、勝ったほ

うの種族にして伴侶に迎えることができるよつするといつもの。

だから毎年夏になると、人と魔族の間でまるでお見合いパーティーのようなスポーツの祭典が開かれるようになったのですが……

なろう作家さんのあつまるサイト『言の葉』の企画小説です。

プロローグ（前書き）

【企画のあらすじ】

『コトノハ』と云われるおつきな世界が在りました。

コトノハでは昔、巨大な悪のドラゴンが各地で暴れ廻っていました。各地に生きる種族達は、頑張ってドラゴン退治に死力を尽くしましたが、いやなんの、ドラゴン強過ぎっす。

惨敗きしてみんな『おう、もうダメダメよ』と絶望に嘆く始末。

そんな時、次元を切り裂いて次元の神様が参上。

『こんばんは、私は悪いドラゴンを追って来た神様です。彼らは元は私たちが製造していた生態兵器なんすよ。ドジな神様がミスっちゃってさ。ここに逃げちゃった、ゴメリンコ』悪びれた様子も無い神様にコトノハの人間達はブチ切れ、リンチした後で神様は言いしました。

『わ、悪かったよ。でもさ、僕は戦闘能力は5のゴミなんだ。けれど、特殊な力は結構あるんだ。自分じゃ使えないんだけどね。そだ、君達にあげるよ。その力使って竜を弱らせて、この封印ボールで封印しちゃって』と、彼らに力と封印ボールを渡した神様は『じゃ、バハアイ！』とすたこらさっさと逃げちゃいました。

職務放棄です。何しに来たんだあいつは？

けれどみんなはこの力を器用に駆使し、悪い竜を各地で封印ボールに封印し、封印が解けないように祠を作って補完しました。

力を持つ者達はやがて子を生み、力は受け継がれていきますが、もう誰がどの力をしっかり受け継いでるのやら？

その頃、自宅に帰った神様はふと気が付きました。

『あ、あの封印ボール。期限は三百年だった。やっべ、もうあの世界は隔離しちゃったからなあ。誰も世界から出られなくなっただけれど、入るのも出来ないんだよね。ま、いっか。力渡したし』

プロローグ

雲ひとつ無いような青空と、焼け付くようなグラウンド。
蝉たちが永い眠りから目覚めて恋の季節を迎えた頃、またあの聖なる祭典の時がやってくる。

- - - - -

ああ、またこの時期がやってきたのだな。
神殿の宝物殿で私は目を覚ました。

我々の生みの親である、あのふざけた神の手によってこの地に遣わされ、そろそろ300年が経過した頃か。

すでに私の兄弟は皆、寿命を迎えている頃だろう。

だが、私は違う！

間もなく力が満ちる。

あのふざけた神を異世界から引きずり出し、復讐する日がくると
思うと、おお、我が魂がいきり立つぞ！！

さあ、人間よ、魔族よ、儀式を始めるのだ。

この私、神たるヴェイスをあがめる祭典、ヴェイスボウルを！！

プロローグ（後書き）

なろう作家の集まるサイト『言の葉』で宮座頭数騎 さんが立ち上げた企画『みんなでファンタジーやるぜ!』の企画小説です。

なぜか野球みたいなものがキーワードに混じってますが、気にしないでください。

企画時にドラゴンズとロッテが優勝争いをしていたのと、企画でドラゴンが提示されていたから思いついたなんて事はありません。短編のつもりが、設定詰め込みすぎて連載になってしまったなんてこともあります。

ええ、絶対にありませんから気にしないでください。

……いてっ。 二枚目の舌嚙んだ。

魔王クリスの憂鬱

コトノハ大陸の中部、ボースベール地方を中心とするヴェイス連邦。

この国には、毎年夏になると行われる奇妙な儀式が存在する。その儀式の名は、ヴェイスボウル。

異世界より伝わりし球技『野球』を元にしたスポーツであり、人と魔族がお互いの伴侶を得るために行う愛の儀式だ。

その聖なる競技ヴェイスボウルの行われるスタジアム神殿。

今は夕日の光が差し込むその控え室に、練習を終えたばかりの男達の姿があつた。

「ぷつはー……汗をかいた後は、やっぱビールに限るね！」
若干裏返った声で、目を細めながら缶ビールを手にした大柄な青年がそんな声を上げる。

風呂に入った後らしく、ずぶ濡れの体にパンツ一枚と言うあられも無い姿でベンチに腰をかけている彼は、飲みかけのビールの缶を片手にかなりご機嫌だ。

普段はスポーツ刈の似合う精悍な男なのだが、残念なことに酔っ払うとすぐに服を脱ぐ癖がある。

素っ裸でないだけ、今日はマシなほうだ。

その筋肉の盛り上がった体を、見目麗しい奴隷女達が忙しくタオルでぬぐいはじめると、彼はその奴隷女を抱き寄せて見せ付けるように口付ける。

敬虔なヴェイス信者の選手が白い目で睨むのだが、彼はそんなことは気にしない。

睨んでいたほうも、ため息をつく諦めて、自らも汗を洗い流すべく女奴隷達を引き連れてバスルームに消えていった。

それを横目で笑いながら、青年はさらにビールを取り出してその蓋をあける。

「オリバー准将、ほどほどにしとかないと」

困り果てた声で、彼の同僚らしき青年が、おそろおそろ声をかけると、

「大丈夫、大丈夫！ 俺は頭が3つもあるんだから、人より三倍飲んでも平気なんだよ！」

ご機嫌な青年の顔の両横から、狼のような犬の頭が2つニョッキリと顔を出した。

よく見ると、真ん中の青年の頭にもピンと立った狼の耳がついている。

その体に帯びた獣性が、青年が魔族……その中でも地獄ケルベロスの番犬と呼ばれる種族に属していることを示していた。

「そのへんにしておけ。頭が3つあっても、肝臓は一つだ」

その時、犬青年よりいくばくか年上の青年がバスルームからあらわれて口を挟んだ。

こちらは丸いモコモコした白い毛に覆われた耳と虎の尻尾。

ピンピンと四方に跳ねる白髪は耳が隠れる程度の長さで無造作に切りそろえられ、バスタオルを巻いただけの上半身には、刺青のように黒い縞模様が浮かんでいる。

10人いれば10人が男前と認めほどの美丈夫だ。

貴族である選手の着替えを手伝っていた奴隷女達が、いつせいに頬を赤らめて下を向く。

「硬いこと言うなよ、モフ將軍。それより、今年の俺たちの相手

は決まったのか？」

とりなすような笑顔を浮かべたまま、21本目のビールに手をかけるオリバー。

その右手を、モフ將軍と呼ばれた青年は問答無用で踏みつけた。

「……まだだ。 今年は、我らが魔王クリス様の初めてのヴェイスボウルとなる記念すべき年だ。 貴様ならともかく、クリス様にアバズレをあてがうわけにもゆかんだろう」

堅苦しいことを言いながらも、その手はオリバーから取り上げた缶ビールの蓋を開く。

そして、物欲しげなオリバーの視線を浴びながら、一気にビールを喉に流し込んだ。

准将や將軍と言う呼び名でもわかるだろうが、彼らはヴェイス連邦に名を連ねる魔族最大の国、カーライル王国を守る兵士達である。現在、彼らの君主である魔王クリス・カーライルのため、そして魔族繁栄のために、結婚相手をさがすべくヴェイスボールのチームを作ったのだが……

実は彼らのお眼鏡にあうだけのチームがなかなか見つからないでいた。

「オリバー、次は黒ビールにしてくれ。 好みから言えばロリンのアビスビールがいいな。 こいつはどうも俺の口には合わない」

旨そうに口元をぬぐいながらも、そんな台詞を言い放つ。

このモフ將軍と言う男、かなり図太い神経をしているようだ。

「俺の愛するワッポー口の淡麗生を侮辱する気か！？ 貴様、表へでろー！」

「冗談交じりに怒ってみせる友人の隣に腰をかけると、モフ將軍は片手を差し出してお代わりを要求した。

「怒るなよオリバー。俺は単に自分の希望を述べただけだ」

「なら、俺のほうからも希望を言っていいいか？」

めげずに新しいビールの瓶を2本取り出し、そのうち一本をモフ将軍に差し出しながらオリバー准将がそう切り出す。

その瓶のラベルに『ABYSS』と文字が記されているのを見て、モフ将軍の尻尾が嬉しそうにゆれた。

「聞くだけなら」

目元を若干嬉しそうに緩ませながらモフ将軍がそれを受け取ると、オリバーは二本の指で瓶のキャップを引き抜いておいしそうにビール口にする。

そして、なぜか真面目な表情でその要望を口にした。

「最近、とあるチームにえらく可愛い子がいるんだ。名前はユウ。キユツと抱きしめたくなるような愛らしさといい、口煩いクソアマ共と違って控えめな雰囲気といい、クリス様好みの相手だと思う。まだどことも試合をして無いらしいが、他の魔族のチームからも試合の申し込みが殺到しているようだ」

そこまで台詞を続けてから、残ったビールを一気に喉に流し込む。

「もし魔王閣下がいらないと云ったら、俺が貰うけどな」

前半は真面目な顔をしていたオリバー准将だが、後半の台詞になるとその顔はニヤケ面にかわっていた。

最後の台詞にいたっては舌なめずりしながらなのだから、始末に終えない。

「ほほう？ お前がそこまで言うなら悪くはなさそうだな。だが、実際に会って見ない限りはわからんぞ」

眉をひそめながらも、モフ将軍はまんざらでもない顔をしている。信用していないと言うよりは、友人の女癖の悪さからかっている

ような感じだ。

「俺の目を疑うのか？」

さも傷ついたといわんばかりにオリバー准将が目を見開くと、

「お前だから疑うんだよ。この色ボケ犬」

モフ將軍は、笑ってその胸を小突いた。

伴侶を2年で失ってしまうという性質ゆえに、参加するたびに違う女と関係をもつことが多いヴェイスボウルだが、その選手の中でもオリバーはすでに5人もの女性を伴侶として迎えている強者だ。

「そりゃないぜ、モフ將軍」

肩をすくめるオリバー准将には目もくれず、モフ將軍はさっさと頭を拭いて着替えを取り出す。

それを見て、周囲の女奴隷達がいそいそとタオルや着替えを手にモフ將軍の世話を始めた。

「黙れ酔っ払い。まあ、お前がそこまで言うなら申し込んでみよう。もつとも、魔王のチームからの申し出を蹴るようなことはすまいがな」

そこで言葉を切ると、モフ將軍派傍らに居た……さきほどからずっと窓の外を眺めている一人の人物に視線を投げた。

「それでよろしいですか？ クリス魔王閣下」

「……良きにはからえ」

答えたのは、黒猫の耳とシッポが目を引き、ひどく小柄でやせた人物だった。

貧弱と言っわけではないが、体格の良い魔族の軍人達に混じるとまるで少女のように見えてしまう。

かといって、彼がひ弱というわけではない。

むしろその放つ気迫は誰よりも鋭く激しい。

凍りつくような冷たい美貌にあてられ、砂漠の太陽のような苛烈な視線に灼かれれば、男女を問わず身もだえしてしまうだろう。

同時に、その華奢な体の放つ危うい魅力が、多くのチームメイトを惑わせている事から『暗黒太陽王』の二つ名を与えられている。

「御意」

そのクリスと呼ばれた少年の前に恭しく跪くと、モフ將軍はさつさと着替え終え、周囲の仲間を見回してから。

「さて、お前らはさつさと着替えて帰れ。閣下の目にその醜い裸体を晒すな」

と、まるで野良犬を追っ払うようにシッシツと手を振った。

「最後はいつもお前が閣下を独り占めだな、モフ將軍。魔王閣下が魅力的なことは否定しないが、まさか男でもかまわないなんて思っただろうな？ ……冗談だ。睨むな」

モフ將軍の殺意のこもった視線に苦笑を返し、オリバーは真面目腐ってその正面に回りこんだ。

「だが、いい加減お前も伴侶決めたほうが良いぞ。毎回ヴェイスボウルに勝利した後、伴侶に誰も選ばないんじゃないやそんな噂が立つてもおかしくないからな」

指をつきつけて、長年の友人にそう忠告すると、オリバー准将は部下に手早く着替えるように指示を出してから背を向ける。

「オリバー。俺は少し残って魔王閣下と打ち合わせをしてから帰る。あとで送迎用の護衛の者をよこしてくれ」

モフ將軍がそう告げる、オリバー准将は、2秒ほどじっとその目を見つめた後に、わかったと呟いて部屋を出て行った。

やがて控え室からすっかり人の気配がなくなった頃、魔王はホツとため息をつく。

「いつもすまん、モフ將軍」

「クリス。ここには誰もいないんだから、モフと呼んでくれないか？　むろん愛を込めてだ」

整った顔をちよつと困ったような形に歪ませてから、モフ將軍はやさしく微笑んだ。

「……すまん。お前の気持ちはわかってるが、私にはどうしても無理だ。私にとってお前は兄のような存在でしかないし、私の好みからするとお前は遅しすぎる」

その色気が匂い立つような笑顔に、クリスは申し訳なさそうな顔を向け、その視線を避けるように横を向いた。

「できれば、見た目じゃなくて中身を見てほしいんだがな」

やれやれと肩をすくめながらも、モフ將軍は少し強引にクリスの肩を抱き、

「俺に諦めさせたかったら、早く相手を見つけて。それまでは何度でも口説いてやるから覚悟しておけ」

嫌がるクリスをスツと抱きしめて、その口元をペロリと舐める。

そして、その体から立ち上る、男ではありえない甘い香りに目を細めた。

「少し汗臭いな」

顔を離れた後に、からかうような笑みを浮かべて、そんな台詞を口にする。

「……イジワル。言っておくが、お前もかなり酒臭いぞ」

恨みがましい視線を向けると、クリスはモフ將軍の分厚い胸を押しつけた。

「それはオリバーにもいつてやってくれ。アイツは普段から飲みすぎだ。それより早く風呂を浴びて来い。迎えのものが来るまでに終わらせないとまずいことになる」

少しぐらいいいだろ……と目線で訴えかけながら、モフ将軍が肩をすくめて体を離すと、クリスはいそいそとタオルを手にしてバスルームに向かった。

「モフ、服を脱ぎたいんだが？」

そこでじつとこちらを見つめているモフ将軍にキツめの目線を送ると、

「なんだよ、俺達は男同士のハズだろ？ 何恥ずかしがってるん…

…はいはい、仰せのままに」

と、残念そうに後ろを向いた。

「……この、ドスケベ。だからお前といい、オリバーとい、男は信用ならんだ。どうせ伴侶にするなら、お前みたいなむさくるしくて小ずるい男よりも、子犬のように可愛い男の子がいい」

モフ将軍に汚物を見るような視線を送るが、モフ将軍はニヤニヤと笑みを浮かべてこう言った。

「なんだクリス。おまえ、シヨタコンだったのか？」

「そういうデリカシーの無い物言いがキライなんだ！ しかも、お前のはわざとだろ！！」

顔を真っ赤にして、噛み付くようにまくし立てるクリスをみて、しばらく眉をしかめたまま口元を緩めるという器用な表情を作ると、やがてモフ将軍はガマンできずに音を立てて吹き出した。

「もついい！！」

荒々しくドアを絞めると、クリスはバスルームの奥に消えてゆく。

やがて、キュイツ……ザアア とノズルと水の流れる音が響き渡ると、モフ將軍はちよつと寂しげな表情で呟いた。

「そういう可愛い反応するから、からかいたくなるんだよ。 わかつてないな」

そんなんだから、俺のような好みでもない男に付きまとわれるんだぞ？

バンッ！

不意に扉が開き、神殿を警備している魔族の兵士が控え室に駆け込んできたのは、そんなタイミングだった。

「大変です、モフ將軍！ 他のチームが、人間の取り合いで大喧嘩を始めてしまつて……」

かなわぬ恋の余韻を邪魔するかのようによく立てる男を、モフ將軍はムシケラでも見るような目で見つめながら、

「殴り合いでも殺し合いでも好きにやらせておけ。 俺は今非常に大事な任務についている」

ツバでも吐くような口調で言い捨てる。

「しかし！」

「……くどい！！ 他をあたれ」

兵士を怒鳴りつけて黙らせると、モフ將軍はどっかりと椅子に腰を下ろし、それでも動くつもりは無いと意思表示をした。

彼がここを離れた隙に、魔王の身に何かあつては困るのだ。

そう、たとえそれが身内であつたとしても、今の魔王と誰かを会わせる訳にはいかないのだから。

だが、

「モフ將軍。 私のことはいいから行つてやつてくれ。 オリバーたちは帰つてしまつたし、貴族連中の喧嘩を止められるのはお前しかいないだろう」

どうやらやり取りの音がバスルームまで届いたらしく、奥からクリスのくぐもった声が聞こえてくる。

「くっ…… しょうがない。早く案内しろ。閣下、できるだけ早く戻りますので、しばらくお待ちください」

モフ將軍は、バスルームのドアの向こう側にむけて恭しく一礼すると、予備に來た兵士を引きずるように部屋の外へと出て行った。

- - - - -

「ふう……行ってしまったか」

不安の滲む声で呟くと、クリスは気持ちを落ち着かせるように肩まで湯船につかりなおした。

「あれにも苦勞をかけるな。私の体がこんなのであるばかりに」
忌々しそうに眉を寄せると、自らの胸をむにと驚掴みにする。

「これ以上育つな、けしからん体め。魔王の命令に従わぬとは、とんだ不忠者であるぞ」

普段はキツくサラシを巻いてあるのでわからないが、おそらくカップぐらいあるそれは紛れもなく女性のもの……そう、魔王クリスは男性しかいない魔族の中で、おそらく唯一の女性であった。

その秘密を知るのは、今は無き先代魔王とその伴侶となった人間の女性。

そして彼女の腹心であるモフ將軍だけである。

父である魔王の跡を継ぐ人間が自分しかいなかったため、やむを得ず引き受けた魔王の地位ではあるが、こんな体では嫁を貰うわけにも行かず、ましてや子を産むなどありえない。

「どこかに落ちてないかな。私と逆で、人間なのに男として生まれてしまった人。年下で子犬のように可愛い奴だと嬉しいんだが」
冷えた湯船に熱いお湯を足しながら、

「ありえないか」

諦めたような苦笑いを浮かべてそう呟くと、魔王クリスは窓の外を飛ぶ鳥のつがいを羨ましそうに見つめるのだった。

とある少女の災難

「ヘクシヨン！」

日も沈み、空が紫から藍色に変わり始めた頃、スタジアム神殿の廊下で、一人の少女が冷えた体を抱きしめてクシャミをしていた。

「……なんでこうなっちゃったんだろ」

少女……今年最も男達の暑苦しい視線を浴びている話題のヴェイスボウルプレイヤーことユウは、自分がこんな場所で風邪をひきかけている原因を恨みがましい目で見つめた。

「貴様、私がユウ殿に声をかけた後に割り込むなど礼儀というものをしらんのか！？」

「だまれ！ 私は貴様に言い寄られて、ユウ殿も迷惑そうだったから救いにきたまでのこと！」

話題になるのは結構だが、ユウがこのような場面に遭遇のはこれが初めてでは無い。

「あの……わたしもう帰ってよろしいでしょうか？ どちらのチームの申し出もお受けするわけは行かないので」

練習で汗をかいた体は、夏の風に煽られて乾かされ、肌の表面では塩が白い粉を吹いたように浮き出ている。

バスタブにつかるとまではいわないから、せめて早くシャワーを浴びてスッキリしたかった。

「まってくれ！ それについては今この馬鹿を黙らせてから改めて話を聞いてもらいたい！」

「誰が馬鹿だ、貴様！！ ユウ殿にはこの俺のチームと対戦してもらわねばなんのだ！ きさまこそシッポを巻いて退散するがいい

「!!」

とまあ、先ほどからこんな調子で延々と引き止められているのだ。

ほかのチームメイトも、当初はいつしよにいてくれたのだが、この魔族二人のどちらのチームもお眼鏡にかなわないと判断すると、とつと帰ってしまった。

その際、ユウも一緒に連れ帰ろうとしたチームメイトもいたが、前に逃げたら魔族の男が激昂して暴れたことがあったので、ユウはこの手のことが発生したらその場でキツチリと話をつけることにしている。

「やっぱりみんなと一緒に帰ったほうが良かったかな」

ユウが何度目のため息をついたとき、後ろからだやどやと大勢の男達のやってくる気配に気が付いた。

「おい、なにしてるんだ帰るぞ」

そのやってきた男達の誰かが、ユウを争って奪い合いをする男の一人に声をかけた。

「まってくれ。今、俺はユウさんを口説いている最中なんだ!」

「なに!? ユウさんって、今年一番人気の!?」

やってきた男達が色めきたちながらこちらにやってくる。

それと同時に、別の方向からも大勢の足音が聞こえてきた。

見れば、その男達は残ったほうの男と同じユニフォームを身に着けている。

「い、いい所にきてくれた! おい、こっちにきてくれ! こいつら、俺がユウさんに試合を申し込むのを邪魔しやがるんだ!!」

その新手の足音に向けて、もう一人の男がそう呼びかける。

そのあと、やってきた男達の間には険悪な空気が流れ始め、ユウはさらにまずいことになった予感がしたが、その行く手は双方の男達

によつて遮られ、逃げることもできない。

「……ふざけんなよ、てめエ!!」

そしてついに、気の短い魔族の一人が、相手集団の男の一人に殴りかかってしまった。

当然ながら、殴られたほうも黙つてはいない。

「ひっ!」

恐怖のあまりしゃがみこんだユウの頭の上で、バキッドカッと肉を殴打する音が響き渡り、辺りに血の匂いが立ち込め始める。

人間同士の争いのように陰湿ではないが、そのぶん魔族の喧嘩は荒々しくて血生臭い。

びしゃっ

顔にかかった液体におそろおそろ手で触れると、生暖かい感触と共に掌が真っ赤に染まっていた。

「ち……血が!？」

恐怖のあまり、目の前の風景が真っ白になってゆく。

「こんな所で寝るな。情け無い」

その時、意識が遠くなりそうになったユウを誰かが力強く引き寄せた。

「下がつてろ。怪我をするぞ」

その魔族は、ユウを人垣の崩れた廊下の向こうに引き寄せると、厳しい表情で争いを続ける魔族たちに向き直る。

その横顔を見た瞬間、

「……か、かつこいい」

ユウの心に生まれて初めて憧れと言う感情が生まれた。

日に焼けた肌に金色の瞳、そして目にかかるほどの長さの真っ白な髪の毛。

その横顔は、魔族になどまるで興味の無いユウでさえ、そう呟かずにはいられないほど凛々しく逞しい大人の男の魅力に溢れていた。

「貴様ら、ここをどこだと思っている！ 恐れ多くも我々の伴侶を定めし聖球ヴェイスの神殿であるぞ！！」

男が一喝すると、一瞬殴り合いをしていた男達が鎮まり、続いて眼に見えて青ざめる。

「誰だお前は……モフ將軍！？」

男達の一人がその名を告げると、モフ將軍と呼ばれた美丈夫は、その顔を不機嫌に歪ませながら、

「俺が誰だか知っているなら話は早い。目障りだ、失せろ！！」
男達をねめつけて、面倒だといわんばかりの表情で一喝した。

だが、

「い、いくら貴殿があのような有名なモフ將軍といえども、ヴェイスボウルに関しては讓れませんぞ」

「そ……そうだ！ ヴェイスボウルの時期に関してなら、我々が誰を口説こうと貴殿にとやかく言われる云われは無い！！」

男達もさるもの、しつこく食い下がろうとする。

その様子に苦々しくため息をつく、モフ將軍は、

「ふん。なら俺がこの子のチームに試合を申し込んでもかまわんな？」

男達を見回し、ニヤリと笑った。

「な、なんだとおっ！？」

「いくらなんでも横暴だ!!」

同じ魔族でも、自分達とモフ將軍では格が違いすぎる。

ましてやモフ將軍のチームには、今年初めてヴェイスボウルに参加する魔王までもが所属しているのだ。

これでなおユウに試合を申し込めば、それは罪でこそ無いが、不忠者として周りからも後ろ指をさされてしまう事になる。

男達は引き下がるしかなかった。

「わかつたらシツポを巻いてとつと失せろ、この負け犬共。おい、小娘。俺は魔王クリスの配下でモフ將軍という。お前のチームにヴェイスボウルを申し込むが、受ける気はあるか?」

むろんこの場を治めるための方便だとは誰もが理解していたが、ユウはあえてこの提案を受け入れずに、自分の立場を明確にするチャンスだと判断した。

「お、おそれながら、ボクの一存ではお受けすることはできません。それに……その……ボクは正式な選手じゃないんです」

こちらの顔を覗き込むモフ將軍の目を真っ直ぐに見つめ、恥にもなりかねないことを堂々と告げる。

「ほう?」

モフ將軍は片眉をピクリと動かした。

この少女、下らぬ面子よりも誠実であること選ぶ性らしい。

子犬のように愛らしい外見といい、このすつきりした性格といい、魔王クリスに純情を捧げてなければ手を出したやもしれん。

まあ、それとは別になぜか食指が沸かないのだが……

そんなモフ將軍の内心を知ってか知らずか、ユウはハキハキした声で

「ヴェイスボウルで伴侶に選ぶことができるのは、試合に参加できたものだけ。補欠のボクでは何かしらの理由が無い限り試合には

参加できません」

周りの面子にむかってそう告げると、芝居がかかった仕草で深々と頭を下げた。

「ごめんなさい」

「つまり、君を伴侶に迎えることができるかどうかは、そちらのチームの監督次第ということか」

楽しそうに苦笑を浮かべるモフ將軍に、ユウは軽く頷くと、いっそ清々しいほどにキツパリと自らの立場を宣言した。

「はい。そしてボクがグラウンドに出ることはまずないでしょう。自分の実力は知っているつもりです」

そのユウの頭に手を置くと、モフ將軍は他の誰にも聞こえない程度の小声で囁いた。

「……行け。ここは俺が抑えておいてやる」

そのまま、軽くユウの肩を叩いて魔族の男達に振り向く。

「聞いたとおりだ。この子の事は諦めるが良い」

そんなモフ將軍の声を背中にききながら、ユウは着替えの入ったバッグをかかえて仲間の待つ控え室へと足を伸ばした。

「い、いや、しかし……」

「くどい!!」

後ろではモフ將軍が、男達の足止めをしてくれている。

今のうちに安全なところまで逃げよう。

暗くなった神殿の廊下を早足で駆け抜ける。

そして5分ほど歩いた後、ユウはふと呟いた。

「ここ……どこ?」

似たような造りをした神殿の内部は部屋を間違えやすい。

ましてやユウは今年初めてヴェイスボウルに参加するのだから、

内部の構造にもあまり詳しくないのだ。

「えっと……ここかな？」

なんとか迷いながらも、ユウは部屋にかかったプレートを頼りにようやく自分の控え室らしきに場所たどり着いた。

「いま戻りましたー」

ドアをあけるとそこにはもはや誰もいないらしく、部屋には明かりすら灯っていないかった。

「みんな帰っちゃったのか……まあ、ボクにとっては好都合だけど」
そう呟きながら、ユウは持っていた荷物から着替えとタオルを取り出して服を脱ぎはじめた。

その汗が乾いて塩の浮いたシャツを脱ぎ捨てると、胸元からまるで饅頭のような形をした綿の塊がポロリと床に落ちる。

「あ、詰め物落ちちゃった」

少女にしては広い肩幅といい、薄く張りのある胸といい、そこにあったのは少女ではなく紛れも無く少年の体。

ユウは地面におちた詰め物を拾い上げると、それをバッグに詰め込んでから下穿きを一気にずりさげる。

そこには、少女の体にはついていないものがあった。

「みんなの帰った後で無いとシャワー室に入れないんだよね」

この事実を群がる魔族たちが知ったら、どんな顔をするだろうか？
なかにはそれでもいいなんていう輩がいるかもしれないけど……
「うわ、きもちわるっ」

自分のアブノーマルな想像に、背筋が寒くなる。

しかし、自分でも貧相な体だと思う。

背は女性に混じっても目立たないほどしかないし、肩の広さも線の細さが手伝ってさほど目立つことは無い。

モフ將軍のような男らしい体にもあこがれるが、人間なのに男として生まれてしまった自分にとってはこれが最良だったのかもしれない。

人という生き物は、異端にとっても敵しいのだ。

その時、バスルームの奥から誰かの動く気配がした。

「帰ったのか、モフ？ 悪いが着替えをとってくれ。バスルームに持って入るのを忘れた」

女にしてはやや低い声がそう声をかけてくる。

誰が残っていた！？

だが、こんな声のチームメイトは知らない。

ユウは、自分が部屋を間違えたことに始めて気付く。

…… まずい！ はやく体を隠さないと！！

あわてて丸めてバッグにつめた下着を取り出そうとするが、焦っているせいか、どこかに引っかかって巧く取り出せない。

「モフ！ お前、わざと無視しているだろ！？ このエロ虎め！！」
ガチャリ

ドアを開けて姿を現した人物に、ユウの目は釘付けになった。

ややつり気味のアーモンド形の瞳、大きすぎず乳首がツンと上を向いた胸元、濡れた黒髪は黒いガラスの滝のように体の両側を流れ、丸みを帯びた卵形の顔立ちは凜々しさと愛らしさの両方を兼ね備えている。

まさに黒百合と例えるにふさわしい、凜とした美少女だ。

だが、その頭には、その少女が魔族であることを指名黒い猫耳がピンと立っていた。

「魔族……なのに女の人!？」

ヴェイスボウルに敗北した人間は魔族にされて配偶者になるが、その場合は変身が解けるまでこの神殿に入ることはできないはずである。

何だ？ 何なんだこの、自分の境遇を左右反転にしたような存在は？

いや、それ以上になんて綺麗なんだろう……

見ているだけでドキドキする。

なに？ この感情。

あまりにも衝撃的な存在に、ユウは体を隠すのも忘れて立ち尽くしていた。

一方、猫耳少女の方もまたユウを見て立ちすくんでいた。

その視線は、ユウの頭からゆっくりと下に下りて下腹部のあたりで止まる。

「人なのに……男の子？」

その言葉と同時に、少女の纏っていたバスタオルがパサリと床に落ちた。

次の瞬間、症状の顔が紅潮し、

「かわいいいいっ!！」

猫耳少女……もとい魔王クリスはもう前途ユウに駆け寄ると、そのままユウに飛びつき、抱きつくようにして押し倒した。

初めての恋とその代償

全裸の美少女にいきなり押し倒されたら、男性諸氏はどう思うだろうか？

なかには嬉しくてしょうがないと言う人もいるかもしれないが、少なくともユウはそうではなかったらしい。

彼は顔を赤らめながらも、必死でクリスの腕の中から逃げようともがいていた。

「ち、ちよつと！？ そこは、キヤーとか変態！！ とか、もつと他の台詞があるでしょ！？ キミちよつと恥じらいが無いよ！？」
できるだけ冷静を装い、相手を正気に戻らせようと話しかける。

おそろしい事にユウよりもクリスのほうが背丈も腕力も上だったため、力では逃げる事ができないと悟り、ユウはクリスを説得する作戦に切り替えたのだ。

「君、ちよつと黙っていたまえ！ 私は今、喜びを感じる事に忙しいのだ！！ ああ、小動物のように愛らしくて、人であり、しかも男の子！！ 神よ、ヴェイスよ、感謝しますっ！ いえ、おいしく頂きますっ！！」

だが、加害者クリスはそんな言葉にまるで耳を傾けず、恍惚としながら、ユウの胸に顔を埋め、その香りを思いつきり吸い込む。

「しょ、小動物いうなーっ！ というか、匂いがかがないで！ なにこの人、変態！？」

ユウの甘いトキメキが、一瞬で貞操の危機のドキドキにかわる。

「どうしたクリス！ 何があった！？」

その時、騒ぎを聞きつけたのかモフ将軍が荒々しくドアを開いて

部屋になだれ込む。

だが、そこにあつたのは……

「……何をしているんだ？」

先ほど助けた少女と同じ顔をした全裸の少年と、その少年の上に跨るこれまた全裸の思い人の姿であつた。

一瞬あつけにとられたが、状況を理解するにしたがつて、みるみる怒りと悔しさが湧き上がる。

その、体をわななかなせるモフ將軍を尻目に、クリスはこともなげにこう言つた。

「見ての通り、獲物を捕らえた」

その顔は、まさにスズメを捕まえてきた猫の顔。

「獲物？」

訝しげに聞きかえすモフ將軍を無視し、クリスは自分の下に組み敷いた少年に囁く。

「おい、珍獣。 お前にヴェイスボウルで勝負を申し込む。 この神殿にいると言つ事はヴェイスボウルのプレイヤーだろう？」

「ち、珍獣！？」

もはや人に与える称号でない呼び名に、ユウが愕然とする。

そう呼ばれてもしたかの無い存在であることは自覚しているが、きわめて遺憾だ。

「クリス、悪いがその子は補欠らしい。 さっき話をしたんだが、今年の試合に出るのは難しいそうだ」

何度が深呼吸をして気持ちを落ち着けた後、モフ將軍が腹のそこから振り絞るような声でそう告げる。

暗に『今年は諦める』と言つ意味だ。

このままなし崩しにゴールインなど絶対にゆるさん！

まさか、こんなクリスのドストライクな存在がこの世に存在するとは予想外だった。

たとえ自分がクリスの好みで無いとわかっていても、時間をかけて、誠意を尽くしてゆつくりと口説くつもりだったのだ。

その希望を、ものの見事に打ち砕いた存在にむけて、モフ將軍は親の敵を見るような目を向ける。

貴様に罪が無いのはわかつているが、恨むぞ少年っ！！

心の中の台詞のあまりの女々しさに、自分を情けなく思いながらも、モフ將軍は必死にクリスが諦めることを願っていた。

いや、勝ち目が無いのはみた瞬間にわかったのだが、それでも諦めきれないのだ。

たのむ、可能性すら無いなら、せめて諦める時間をくれ。

いきなりクリスに伴侶ができてしまつては、激情をもてあまして気が狂つてしまう！！

「おまえ、妙に詳しいな」

そんな内心を知らないクリスは、モフ將軍がユウのことを知っていたことを訝しく思い、首をかしげた。

基本的にモフと言う男は、女など性欲を処理する道具としてしか見ていないので名前などすぐに忘れてしまう。

例外は、自分の家の使用人と魔王である自分だけだ。

「その子は、一応お前の伴侶候補だったからな。名前はユウ。話には聞いていただろ？」

それはつい先日オリバーが口にしていた名前だ。

その時はどんなチームが相手でも伴侶を選ぶことが無いと知っていたから、クリスにとってはどうでもいい名前だった。

だが、まさかその名前の人物が、クリスの運命の人となるとは誰が予測できるだろう？

「そうか。だが、なんとしても今年中に私の伴侶とするぞ。

人でありながら男などという、私と逆の立場をもつものなど他にありえん。しかも私の好みのどストライク！これがヴェイスの導き以外の何だというのだ？」

そう語るクリスの顔は、まさに恋する乙女。

その日焼けにも負けず白く滑らかな頬を赤らめ、売るんだ瞳で熱い視線をユウに注いでいる。

「クリス。自分が何を言っているか解っているか？ いや、俺の

気持ちは考えているか？ くそっ、嫉妬で頭がどうかかなりそうだ」

握り締めた右手が痛い。

クリスが何か言ったたびに、心の中がズタズタになる。

モフ將軍の握り締めた手から、赤い雫が垂れ落ちた。

「すまん。今は私も舞い上がっていて他人の事など考える余裕が無い。だが、何とか私の想いを叶えてくれ。モフ、こんなことを頼めるのはお前しかないんだ」

なんと残酷な言葉だろう？

モフ將軍は、心の中で涙した。

おそらく舞い上がったクリスには自分が何を言っているかすらわかっておるまい。

だが、信頼というなら自分のほうに分があるし、まだユウ自身はどう思っているかも不明だ。

……勝負はまだ終わってない！

こんなか細いガキに負けてたまるか！！

「というわけだ、少年。お前のチームの責任者に合わせてもらおう」

嫉妬で目をギラギラさせながら、モフ將軍は片手でユウをクリスの下から抜き取った。

「は……はひ」

そして混乱してろれつの回らないユウの耳元でばそりと呟いた。

「あと……悪いが一発殴らせる。手加減はする」

「お、お手柔らか……いえ、それで貴方の気が済むのならどうぞ全力で」

か細いながらも芯の通った答えに、モフ將軍の顔が強張る。

「かわいい顔だけがとりえじゃないんだな。ちょっとだけ見直してやる。だが、今日からお前は俺の敵だ！」

そう言い放つと、モフ將軍はユウを控え室の床に投げ捨てた。

「モフ……！」

クリスはユウの傍に駆け寄り、その小さな体をそっと抱き起こすと、モフの方をキツと睨みつけた。

だが、その悲しげな目にハッと言葉を失う。

「小僧、バスルームを使わせてやるからさっさと汗を流して来い。ただし、湯船にはつかったら殺す」

顔を隠すように横を向いたモフが怒鳴りつけると、

「は……はひっ！」

ユウは逃げるようにバスルームに消えていった。

「クリス、お前もさつさと服を着ろ。いつまでそんな格好をしている気だ！？ いい加減にしないと無理やり襲うぞ！！」

言われてクリスは自分が全裸であることに気付く。

今度は羞恥で顔を真っ赤にしながらも、クリスは慌てて胸にさらしを巻いて男物の服を身に着けた。

「そ、その……なんだ。すまない、モフ」

着替え終わってから、自分が何を言ったのか思い出し、クリスは苦虫を噛み潰したような声で謝罪の言葉を口にする。

「謝るな。謝るぐらいなら最初から俺以外の男に惚れるな。それに、お前は王だ。軽々しく家臣に謝罪するなどあってはならない。そしてなによりも……」

そこで言葉を切ると、モフ將軍は強引にクリスの肩を抱き寄せた。「俺はまだ諦めたわけじゃないからな」

そしてクリスの耳元に顔を寄せると、嫉妬に狂った声でそう囁いた。

「クリス、護衛が着たらお前は先に帰れ。俺はこのまま小僧のチームに試合を申し込んでくる」

そう告げると、モフ將軍はドアを開いて護衛の兵士を呼んだ。

「モフ、私は……」

クリスが何か言いかけたが、その言葉が終わるより先に、モフ將軍は駆けつけた兵士の方へとクリスの背中を押した。

「閣下を王宮まで送ってくれ。俺はまだやることがある」

「はっ、命に代えましても、魔王閣下を守り、王宮へとお届けします！」

5人ほどの兵士が、声をそろえて返事をする、クリスを覆い隠

すように取り囲む。

「では、魔王閣下。王宮にまいりましょう」

護衛隊長に促され、クリスは俯いたまましぶしぶ歩き出した。

ユウともつと話をしたかった。

なによりも傷ついたモフに謝罪をしたいと思った。

このまま立ち去れば、なにか嫌なことがおこりそうな、そんな不安が胸を掠める。

「ああ、閣下。最後に一つだけ言い忘れました」

帰宅しようとするクリスの背中に、モフ將軍は思い出したかのよう
に声をかけた。

「な、なんだ……モフよ」

その朗らかな声に不気味なものを感じながら、クリスは顔だけ振り返る。

「私は閣下の兄ではございませんので、そのおつもりで接してくださいませ。あまり親密になりすぎますと他の部下が嫉妬します故」後半の台詞はこじつけた。

本当の意味は、これからは兄ではなく一人の男として見るという宣言に過ぎない。

「わかった。今後気をつける」

そう答えながら、クリスは自分が兄と慕っていた人物を失ったことに気が付いて愕然とした。

なんと恐ろしい……

いままで、恋とは甘く楽しいものだと思っていた。

いや、初恋をした今ならわかる。

恋はすばらしい。

見るもの全てを薔薇色に変えてくれる。

だが、恋はその見返りとして周囲の人々を傷つけることもあるのだとは知らなかった。

クリスは自らの罪を自覚し、ため息をつく。

すまない、モフよ。

だが私が恋を覚えたことは叱らないでくれ。

どんなに自分勝手に都合が良くても、この暖かい気持ちに罪だとは思いたくないのだ。

酔っ払いは犬もくわない

「ユウ、でかしたああああっ!!」

モフ將軍をつれてチームメイトの下へと戻ったユウを待っていたのは、『恋する乙女達』であった。

「……ちよつとユウ、あれってあのモフ將軍でしょ？ どうやって知り合つたのよ」

小声で囁くチームメイトに、ユウは驚いて聞き返した。

「そんな有名人なの？」

きょとんとしたユウの顔を見て、こんどはチームメイトの方が驚きの声をあげる。

「あきれた！ あんた本当に魔族の人たちに関心ないのね。いくら顔がかわいくても、そのまんまだと嫁きおくれて賞味期限きれちゃうわよ？」

そう言つて差し出したのは、彼女の愛読している雑誌。

その表紙にはデカデカとモフ將軍の写真が飾られていた。

「えつと……今年もやはりこの人！ いい魔族^{おし}ランキング不動の一位!？」

ページを捲ると、なみいる役者や芸能人を押しつけて、堂々と一位にえらばれたモフ將軍の写真とプロフィールが3ページにわたつて特集されている。

「いままで何人もの女性と浮名は流しているけど、全部遊びか付き合い程度。ヴェイスボウルでは負け知らずなのに、未だに伴侶がないって事で有名なのよ？」

ちらりと本人の方を見ると、並み居るチームメイトに囲まれて動けなくなっている。

ここぞとばかりに、かなり突っ込んだ質問をされているようだが、答えかねることに關してはその男くさい顔に渋い笑みを浮かべて曖昧にかわす。

そんな様子を遠めで見ながら……

「そうそう。噂では人妻にしか食指が沸かないんだってー。やだ、私手を出されたらどうしょ？」

「あー ありえないありえない。今の旦那で満足しておけ」
既に何度も同じ相手と伴侶になっているチームメイトたちがそんな軽口を叩き合う。

彼女たちはすでに相手がいるので、他の面子に遠慮している形だ。ちなみに他人がヴェイスボウルで手に入れた女性に、他の魔族が手を出して子供を作るといふ話は、実はそう珍しくない。

所詮は男と女という事だ。

「すまんがそろそろ話を聞いてくれないか？」
さすがに埒が明かないと思つたのか、モフ將軍が女性陣を掻き分けてチームの監督に声をかけた。

「はいはいー では、窺いましょうか」

そんな軽い調子で応じたのは、およそ30代前半のふつくらとした感じの女性だ。

美人というよりは可愛い、そして可愛いというよりは母という言葉がよく似合う。

もつとも、外見と言動こそゆるい彼女だが、中身はなかなか陰険な策士だったりするので油断は禁物だ。

「用件は唯一つ。君達にヴェイスボウルの対戦を申し込む」

無駄なことはしたく無いとばかりに用件のみを述べると、モフは続けざまにこう続けた。

「ただし、一つ条件が」

「なんですかー？」

にこやかに笑いながらも、油断無く監督が目を光らせた。

「そこにいるユウ君を試合に参加させる事。それだけが唯一にして絶対の要望だ」

どうだといわんばかりの態度でモフ将軍が告げると、監督は一瞬だけ底意地の悪そうな顔でクスリと笑い、

「ダメだと言ったら？」

小首を傾げて尋ね返した。

「この話は無かったことに」

その台詞は想定外だと言わんばかりにモフは目を伏せながら笑ってみせる。

「では、無かったことに」

「理解していただき感謝……なんだと？」

飛び込んできた予想外の返事に、モフは目を見開いた。

仮にも王族のいるチームからの申し込みを断るようなチームは、まず存在しない。

それはあまりにも不敬だからだ。

周囲で成り行きを見守っていた選手達からも、驚愕の叫びと罵倒が聞こえてくる。

玉の輿を狙う彼女達からすれば千載一遇のチャンス。

このままでは監督が彼女達から絞め殺されかねない。

だが、監督は聞こえてくる罵詈雑言を片手で押さえつけると、

「そんな風に条件をつけられて正選手レギュラーになつたとしても、ユウは周りから後ろ指さされるだけですよー？ 私はこのチームの監督として、そんな条件のめるわけじゃないじゃないですかー」

笑ってそう告げた。

「つまり、断ると」

ひきつった顔で睨みつけると、監督ではなく周囲からヒィツと悲鳴があがる。

美形は怒ると迫力が違うのだ。

「そうなりますねー そちらが条件無しでというなら構いませんけどー」

その視線を向けられた監督はというと、あいかわらず、のほほんとした笑みを浮かべていた。

「悪いが、ユウ君が参加しないなら、このチームと試合を組む必要は無い。この話、無かつたということぞ」

もっとも、内心ではユウとクリスの間を引き裂いてしまいたいモフは、これ幸いとばかりに話題を切り上げようとする。

これでクリスが悪い夢から覚めてくれたら万々歳だ。

「はい、そちらがそれでよいならどうぞー あまり賢くはないかもしれないかもしれませんけどー」

「……どういう意味だ？」

その引つかかるような言い方を不快に思いながらも、モフ將軍はその理由を問いたです。

「ウチみたいところに試合を申し入れて、断られたなどといったら、世間はと思うでしょうねー？」

「何っ!？」

思いもよらない落とし穴に、モフは目を見開いた。

「ウチはハクがついていいんですけどー そちらは魔王さまの対戦相手を探すのにジャマになるんじゃないかとー あ、ちなみにウチに試合を申し込んだという話は、とつくにマスコミが嗅ぎつけてますよー？」

そもそも、こんな格下相手に試合を申し込む事自体が異例なのだ。当然ながら世間の注目があつまるのは否めない。

「ふん。 会って見たら我々の相手としてふさわしくない事がわかったといえはよいのだ」

「でしようねー それじゃ面白くないと思う人がいなければの話ですが」

マスコミと呼ばれる人種はよく真実を知ると主張するが、残念なことに真実を伝える義務をよく放棄する。

真実が衆目にとって面白いとは限らないし、なによりも真実ではメシは食えないからだ。

「スキャンダルで強請る気か!？」

目をむき、相手の襟首を掴もうと手を伸ばしたが、相手が女性であることを思い出しギリギリで堪えた。

「いいえー 私はどちらでもいいんですよー？」

その震える指先を鼻で笑い、監督はテーブルにおかれてカップを手にしてお茶をすすする。

「……雌狸め!」

ドンつと、テーブルに拳を打ちつけ、モフ将軍が奥歯を軋ませながら唸ると、

「ご高名なモフ将軍に褒めていただき光栄ですわー」

監督は勝ち誇った笑みを浮かべてカップを机に戻した。

「いいだろう。試合は引き受ける。だが、補欠しか出すつもりは無いからな――」

試合に参加できなければ、伴侶を得ることも伴侶にされることもない。

だれがこいつらを伴侶に選ぶものかと、全身で拒絶しながらモフ將軍は立ち上がった。

そのまま、荒々しく足音を立てて部屋を出てゆこうとする。

さすがに悪辣すぎたかと笑いながら、監督はその広い背中に台詞を投げた。

「一つ付け加えると、ユウ君、けっこう有望なんですよー？ もしかしたら、当日までにレギュラー入りしている可能性もあるとだけ言っておきますわー」

その台詞に、モフ將軍は振り返りもせず、

「そんなこと俺がしるか！ ああ、そうだ。そのガキ、周りに迷惑だから来年からはチームからはずしておけ！！ とんだ美人局だ――」

怒鳴るように言い捨てると、そのままドアを力任せに閉める。

その際、ドアのすぐそばにいたユウの耳に小さく「くそっ、酒でも飲まずにやってられるか！」と、貴公子にあるまじき発言が聞こえてきたが、頭を横に振って聞こえないフリをする事にした。

「怒らせちゃいましたねー しかもあの方、ユウ君が狙いじゃなかったみたいだし…… まあ、とりあえず望外のチームと試合もできるし、眼福だったし、これで良しとしますか」

モフ將軍の帰った後、チームの事務所は蜂の巣をつついたような騒ぎになった。

あるものは、魔王のチームと対戦するのだからユニフォームを新調しようかと浮かれ、ある者はモフ將軍を怒らせるなんて何考えてるんですかと監督に詰め寄る。

そんな中、一際剣呑なオーラを放つ人物が一人。

「ユウ、一つ言っておきますけど、このチームのエースはこのワタクシでしてよ?」

そう冷たく言い放つのは、このチームのエースであるアレサ・フレデリック嬢だった。

「あ……アエラさん。監督がどうおっしゃったのかは知りませんが、自分の実力はわかっていっているつもりなので……その……」

先ほどの監督の発言……ピッチャーと言うポジションのユウが試合に出る可能性があると言う言葉は、それ即ちユウが彼女の地位を脅かす可能性があるということだ。

彼女にとって、これが面白いはずも無い。

「このワタクシを差し置いて、貴方がエースとしてマウンドに立つなどというくだらない夢は見ないことをお勧めしますわ!」

たたきつけるようにそれだけ言うと、アレサ嬢はそのまま踵を返してツカツカと部屋を出て行った。

「ど、どうしよう。アエラさん怒らせちゃった」

彼女はこのチームでも監督に次ぐ権力者であり、たしか実家は侯爵に名を連ねる大貴族である。

平民の出身で、しかも補欠のユウからすれば雲の上の人物だった。そんな彼女を敵に回し、無事でいられるわけも無い。

ましてや、彼女を怒らせてチームからたたき出された乙女は数知れずという、輝かしい実績まである。

もしかすると、モフ將軍の願いどおりに来年はこのチームには居られないも……ユウはその真つ暗な未来に思いを馳せた。

- - - - -

とある高級マンションの一室。
暗い寝台の上でうごめく大きな影。

耳を澄ませば、激しい息遣いと共に、濡れた靴で誰かが歩いていくかのような湿った音が聞こえる。

やがて、男女のどちらからともなく野獣の唸り声のような声が高まり……

ピリリリリリリ　ピリリリリリリ

まるで見ていたかのような最高のタイミングで鳴り響く携帯電話の呼び出し音。

大きな人影……おそらく男のほうで、舌打ちをし、不満の声をあげる女をよそに電話の通話ボタンを押す。

「誰だテメエ！　殺すぞ、ボケ！！」

電話が繋がるなり、男が受話器に向かって罵声を飛ばすが、通話の相手もまた同時に大声でがなりたてた。

「くおらオリバー！　貴様がお楽しみ中なのはわかってる！　無駄な抵抗はやめて大人しく電話に出ろ！！　さまなきや殴りこむぞ！！」

微妙に呂律の怪しい声が、やけに高いテンションで、鼓膜に穴を開けんばかりの音量で叫びまくる。

「っざけんな、このクソヤロウ！！　電話に出てるからテメエの寝言聞いてんだろが……」って、誰かとおもえばモフかよ、ちっとは

遠慮しろ！！ それともまさか、緊急事態か？」

ふとその声が、上官にして長年の悪友であることに気付き、何かあったのかと身構える。

本来なら軍の將軍などただの名誉職みたいなものだが、モフは実際に軍を纏めているこの国では珍しい実力派だ。

もしかして、何かとんでもない事件がおきて緊急の呼び出しを…するわけがないな。 どうみてもこれはただの酔っ払いだ。

「ぜんぜん。 で、オリバー暇か？」

「死ね！ この馬鹿！！ お楽しみ中って言ったのはテメえだろ！
！ 脳味噌えぐって魚のエサにしてほしいか、ゴルフ！！」

オリバー准将は、自分の頭の中で何かがブチブチっと2〜3本ほど切れたのを感じた。

「よし、暇だな？ 遊びにゆくぞー！」

怒鳴られたにも関わらず、電話の向こうのモフ將軍は勝手に了承したとみなし、言いたい事だけ告げるといきなり会話を切る。

「来るな！ おい、馬鹿！！ ……切れやがった」

怒るというより、むしろ啞然とした表情でオリバーが呟いて3秒後。

ドンドンドン

いきなりマンションのドアを殴りつける馬鹿がいる。

まさかとは思ったが、そのまさかな人物の音がドアの向こうから響き渡った。

「おい、オリバー！ 大親友のモフ様だぞー」

間延びした声で、近所迷惑も顧みず喚き散らす大親友。
いっそ首でも絞めて静かにしてやろうかと、ベッドの下に落ちて

いた下着をはいて玄関のドアを開ける。

……もあつ

たちまち部屋に流れ込む熟柿の匂い。

「くそつ、ふざけるなモフッ！　って、酒くさっ！？　……完璧に酔ってるな」

ドアの隙間から覗くのは真っ白な毛に覆われた虎の頭。半獣化しているが、男はモフ將軍に間違いなかった。

しかも、目は充血し、口から舌がはみ出て、さらに涙と鼻水で顔がグチャグチャになっている。

「あー？　誰が酔ってるってー？　酔ってないよー　俺はあー　アルコールしか口にいいー　してないぞおおおおおー！　うはははは、俺は無実だあああああ！　無実なんだあああ……無実なんですううう……ぐずっ」

「だあああああつ！　ダメだ完全に頭とキャラがふつとんでやがる。つたく、どうしたんだよモフ。　先月からおまえ禁酒してたんじゃないのか？　まあ、最初から無理だとは思っていたが、いささか早すぎるぞ」

普段から大酒のみの友人だが、酒癖が悪すぎてつい先日も歓楽街のど真ん中で一晩中大騒ぎしたばかりなのだ。

ちなみに彼につけられた『イルミガルドの大虎』という名は、その仕事の手腕につけられた敬称ではない。

後日その時おさめた、大虎の名にふさわしい動画を見せたところ、彼はその場で禁酒宣言を打ち出した。

「な……何もねえよー……ううつ、ぐずつ。　うおおおおおおおぐああああああおおおおおおお」

途中で泣いているのか吼えているのか解らなくなる。
まったくもって、酔っ払いというのは理解不能だ。

「な、泣くなよモフ!? あー こいつが泣き上戸だって事忘れてたよ」

ちなみにオリバーも負けず劣らず酒癖が悪く、しかも脱ぎ上戸。その二つ名を『大自然の王』という。

軍の上層部の、しかも実力派でしられる二人が、二人揃って『軍の酔っ払い四天王』にエントリーされているのだから始末に悪い。

本音を言えば、いますぐこの酔っ払いを簀巻きにして近所の川に投げ込み、お楽しみの続きに突入したが、とりあえずここでモフを追い払えば、明日はわが身である。

オリバーが打算と友情と面倒くさを天秤にかけながらうなづいてると、

「オリバー、酒くれ」

さっきまでの号泣が、今度は一変して冷静に酒を要求。

このわけのわからないテンションの変化がこの酔っ払いの最大の特徴だ。

付き合わされるほうは、どこまで本気なのかわからなくてストレスが溜まる。

「わかったよ。 わかったからとりあえず上げ」

こうなった場合、何を言っても無駄なのを経験上知っているオリバーは、しぶしぶ親指で部屋を示し、中に入れと合図を送る。

そして寝室の奥で不機嫌そうに様子を窺っている女……一昨年のヴェイスボウルで伴侶にした女性に向かって外を指差した。

「悪いな、今日のところは帰ってくれ」

たちまち返ってくる罵詈雑言の嵐。

今度買い物に連れてゆくことを約束させられなんとかお引取りいただけた後に、オリバーはため息をつきながらサイドボードから何本かの酒瓶を取り出してグラスに注ぐ。

「で、何があつたんだ？」

オリバーがグラスを差し出すと、モフはそれを引つ手繰るようにしてあおり、お代わり！とグラスを付き返した。

「何もねえよーだ。 ううつ、うつく、ふえああああああああああああ」

ふてくされたような顔で睨みつけてきた後、どつか壊れたかと思えない勢いで号泣しはじめるモフ。

まさに、100年の恋も冷めるような有様だ。

事実、彼が女と別れる原因が素全てコレである。

「まるで女に振られたかのような壊れ方だな」

苦笑交じりに、ふとそんな冗談を口にした瞬間、

「うごああああああああああああああああ」

今まで見たことも無いレベルで涙と鼻水を撒き散らしながら七転八倒。

泣いているというより、何かの発作を起こしたかのようだ。

「お、おい、大丈夫か！？」

「うひひひひ だいじょうびー ……ぶおおおおうがあああああああああー！」

テンションをジェットコースターのように上下させ、手足をジタバタさせながら、子供のようにごろごろと床を転がる。

一応病気ではなさそうだが、その有様はさながらフライパンの上で踊る断末魔のエビのように悲痛だ。

「……まさか本当にふられたのか！？ どこの誰だよ、こいつがこ

「ここまで壊れた原因は!？」

仮にも世間ではモテモテで通っているモフだが、オリバーの知る限り本気の恋愛をしたことは無い。

「まあ、いいや。とりあえず飲め。飲んでさっさと潰れてくれ」
考えても仕方が無い。

今は、この酔っ払いをなんとかして、自分の生活に平穏を取り戻すのが先決だ。

ため息と共に呟くと、オリバーはキュポンと音を立てて、グラスに液体を注ぎ、モフの前に差し出す。

その手にした瓶には『エチルアルコール消毒用』と書かれていた。

知らない天井と知らない美女

「ここは……どこだ？」

モフが目が覚めると、目の前にあったのは彼の知らない部屋の天上だった。

違和感を覚えて、布団の中をまさぐり腰の辺りに手を伸ばすと、そこにあるのは、やや汗ばんだ自分の素肌。

「パンツ……はいてねえし」

とりあえず全裸は落ち着かないので、魔族の持つ獣化の力を起動して全身を虎の毛で覆う。

特に大事なところは、毛で隠れるように念入りに。

そして嫌な予感とともに横を向くと、そこにあったのは、予想通り見知らぬ美女。

「ま、またやつちまったか」

言い訳できないその現状に、肉球のついた両手を顔を隠す。

内心青ざめながら呟くように、この手のトラブルはこれが初めてでは無い。

呪いのせいで子供ができないためか、この国の貞操観念はかなり緩い。

だが、さすがにこれは問題のありすぎる行動だ。

そして有名人であるモフの下半身の事情は、常にマスコミの興味が付きまとう。

下手をすれば明日の週刊誌の表紙は自分が飾る事になるだろう。

「それにしても……好みだ」

改めて隣で眠る女性の顔をしげしげと観察し、モフが呟く。

美しい寝顔だ。

腰の辺りまでありそうな黒い髪は、癖もなくサラサラと流れ、キツ目の顔立ちのわりにかわいい鼻。

長い睫毛に縁取られた瞳はどんな色をしているのだろうか？

女の顔に見惚れて、頬を若干赤らめるモフだが、

「いかん。俺にはすでに心を決めた女が！」

何かを振り払うかのように頭を振る。

あまり下半身の身持ちのよい男ではなかったが、モフはそれなりに純真だった。

むしろ二股三股するほど器用ではないというべきだろうか。

「とりあえず、ここはどこだ？」

ふと気になって、昨日の夜の事を思い出す。

「たしか、オリバーの家の酒を二人で全て飲みつくして、外へ飲みに出ることになったんだよな」

当然、モフのおごりである。

その際、盗まれて困るようなものは全てオリバーの家に残すというあたり、この二人がどれだけ頻繁に問題を起こすか理解できるだろう。

「で、いきつけの酒場^{バー}に行ったら、この女が失恋の自棄酒あおっているところで……」

そのまま、どちらともなく恋の話となり、酔っ払い同士の水かけ論に突入。

やれ『男が悪い』やれ『女が悪い』と、真夜中まで繰り広げた拳句、ふたたび自分の泣き上戸が発生し、今度は『なんでお前みたくない女振るんだよ。そいつ馬鹿だ』とか言っちゃって……

たしか、最後には女に『慰めてあげよっか?』といわれて、『まだ好きな人を諦められないんだ。君を弄びたくはない』とか寒い台詞吐いた挙句に、『遊びでいいよ。少しだけその人のこと忘れさせてあげる』といわれてそのまま彼女のマンションへ……

ぎゃー！ 死ね！ 昨日の俺よ、死んでしまえ！！

薄い夏蒲団を頭から被りなおし、羞恥と後悔で暴れたくなるのを必死でこらえる。

「おお、我らが魔王よ、この愚かで哀れな俺を許したまえ！！」

心の中のクリスに散々謝罪の言葉を吐いた後、
「とりあえず服を着よう。まずはそれからだ」

ここにおいて更なる混乱に巻き込まれるのを避けるべく、一目散に逃げ出すことにした。

なにはともあれ服が無いので、とりあえず完全な白虎の姿に変化すると、布団からのっそりと四足で這い出る。

そして、自分の服を探すべく、その太い手足を器用に動かして部屋の物色を開始した。

だが、その時……

「姉さーん、起きてるー?」

まずい、誰かきた!?

突如、ドアの向こうから聞こえてくる声に、モフは驚いてタンスの上にヒラリと飛び乗ると、そのまま息を潜めた。

「あれ? 昨日また誰か魔族を引っ掛けて帰ってきたと思ったんだけど……
すでにかえっちゃったのかな?」

入ってきたのは、栗色の髪の毛を顎の辺りで切りそろえた、息を呑むほど可憐な少女……のように見える少年、ユウ。

「（なんでこいつがここに！？）」

思わぬタイミングで姿を現した天敵に、モフは埃まみれのダンスの上で息を呑む。

「ん……ん……あ、ユウ？　おはよ。　痛っ」

ユウに起こされると、件の美女は大きく伸びをして、頭を抑えた。

「もー　姉さん、男と別れて色々としょっくなのはわかってるけど、そのたびに飲みに行つて別の男引つ掛けてくるのはよしなよ。　いい加減、近所からも色々言われてるんだし」

持ってきた水差しから、コップに冷たい水を注いで手渡すと、ユウは腰に手を当ててため息をついた。

「いいじゃない、ユウ。　言わせておけば？　どうせ持てない女の僻みよ」

その非難の言葉を鼻で笑い、美女が傲慢な仕草で前髪を掻きあげると、体に纏っていた掛け布団が滑り落ち、その理想的な曲線が露わになる。

ダンスの上でまんじりともせずに様子を窺っていたモフの目が釘付けとなり、喉がゴクリと音を立てた。

「はい、これ二日酔いの薬」

そんなモフの欲情に満ちた視線には気付かず、ユウは持ってきた紙袋を美女に手渡す。

「あいかわらず気が利くねー　あら？　そつえば彼、どうしたんだろ？　さっき起きたときは隣でイビキかいていたのに」

そこで初めて、美女は隣で寝ていたモフの姿が無いことに気がついた。

「ふられたんじゃない？ どうせ、一晩だけの関係でいいからとか、慰めてあげるとか言って寂しい男引ッ掛けてきたんでしょ」

それが彼女のいつものパターンらしく、ヨウはあきれた顔で肩をすくめる。

「（寂しい男で悪かったな！ お前のせいだ、お前の！！）」
まさにそのパターンでお持ち帰りされたモフは、当然ながら面白くない。

「可愛くないこと言うわね。 ま、あたってるけど。 でも、今回はちよつと格が違うわよ？」

嫌そうに顔をしかめた後、美女はちよつと自慢げに鼻を鳴らした。

「はいはい、姉さん毎回そういうよね」

今回は本当に男前を引ッ掛けてきたのだが、ユウは美女の言葉をまるで信じようとはしない。

これが普段の行いというものだろう。

タンスの上では、なぜか見守るモフがちよっぴりイジけていた。

「今度は本当。 なにせ、うちの国の將軍さまそっくりだったんだから」

「使用軍様って、モフ將軍？ はいはい、どうせまた酔っ払って見間違えたんでしょ？ 前は、オルロフ王子と瓜二つとか言って、髪の毛の伸びたパンチパーマのヤクザ連れ込んでいたよね」

オルロフ王子は北隣の州国の第二王子で、クリクリとした巻き毛がトレードマークの羊魔族の美少年だ。

たしかにシルエツトは似ているかもしれないが、それを見間違えるとはあんまりと言うものである。

どうやらこの美女、モフやオリバーと同レベルの酒乱らしい。さしずめ、口説き上戸と言った所か？

「あー あれは失敗だったわ。 でも、今回こそ本当よ」

その時の事を思い出したのか、美女の視線があさつての方向を向いた。

よほど酷い思い出だったのだろう。

よく見ると、その頬に冷や汗が流れている。

「はいはい。 まあ、相手に逃げられたら終わりだけだね」

ため息と共に、あきれたように呟くと、ユウは付き合ってられないといわんばかりの態度で肩をすくめ、部屋を出て行った。

「あーん、私のモフ様、どこいったのー？」

現在タンスの上で白い虎になって様子を窺っているのだが、いまさら彼女の前に出るのはためらわれる。

ふと下の様子を観察すると、布団の下から見慣れた男物のシャツの袖がはみ出しているのが見えた。

……どうりで服が見つからないわけだ。

やがて美女が、その薬を飲んで二度寝を決め込むと、モフはネコ科の敏捷性を生かして音もなく飛び降り、気付かれないようにして皺くちやの服を回収し、素早くそれを身につけて外へと逃げ出した。

マンションの玄関で、ユウがいないか確認してから、おそろおそろモフは表に顔を出す。

パパラッチの気配も無いし、どうやら週刊誌のトップを飾るハメにはならずすみそくだ。

「くそっ、まさかユウの姉に手を出してしまうとは」
モフ將軍一生の不覚である。

「けど、いい女だったよな」

思い出してフーっとため息をつく。

別にそこまで色情狂というわけではないが、ずっと想い人の傍でおあずけを喰らっているの、モフもなにかと溜まっているのだ。

そして、胸ポケットから出した愛用のサングラスをかけながら、ふと思い出す。

「そっいえばオリバーの奴はどうしたんだろう？ 奴のことだから、たぶんまた全裸で警察に保護されているとは思うんだが」

- - - - -

一方、噂のオリバー准将は……

「ぶえつくしよい」

予想通り、交番で一夜を過ごしていた。

「この、鼻の奥にツンとくるクシャミの感覚は……モフの野郎だな！？」

むろん全裸である。

……まあ、さすがに人の姿ではなく、頭の3つある狼の姿だったが。

「おい、俺の着替え出してくれ」

意識がはつきりするなり、オリバーは交番に詰めている兵士に向かって声をかける。

すると、

「あ、起きられましたか。 今、出てきます」

やや年配の兵士が、馬の尻尾をふりながら、奥からいそいそとオリバーの服を出してくる。

恐ろしいことに、この付近の全ての交番にはオリバーの着替えが常備されていた。

いちいち知り合いに連絡を取って着替えを持ってこさせるより、そちらのほうが早いし、あまりにも頻度が高いからだ。

軍の酔いどれ四天王の筆頭は伊達じゃないのである。

なんともものんきな軍隊だと思われるかもしれないが、そもそもこの国が結界で覆われている以上、兵士の仕事は治安維持のみであり、国防の必要はまずない。

内乱に関しても、ドラゴン襲来時にロクな力が与えられなかったせいで派手なことにはならないし、かわりに科学が発達したものの、兵器として転用することに強い禁忌^{タブー}があるため誰も興味すら示さないのだ。

さらにいざ内乱が起きたとしても、その決着は聖球ヴェイスによる仲介が行われて『ヴェイスボウルで勝負だ!!』になってしまうので人傷沙汰になるなどありえない。

そのため、彼らの仕事の半分は、モフやオリバーと言った貴族の次男坊や三男坊の受け皿であり、彼らの起こす問題の後始末である。ちなみにモフは東の州王の三男坊で、オリバーも実家に帰れば伯爵様の次男坊だ。

「さーて、俺の親友をボコボコにした悪女のツラでも拝みにゆくと思いますか」

人型に戻り服を身に着けると、オリバーは大きく伸びをして今日の計画を立てる。

この時期は、一年おきに軍の半分がヴェイスボウルのための長期休暇に入るため、彼は正直暇なのだ。

「まあ、犯人がいるとしたらあのチームだな」

昨日、自分がモフに紹介したチームを思い浮かべて、オリバーは怪訝な表情を浮かべた。

「見た感じ、そんな酷いフリ方をするような娘には見えなかったんだけどな」

ケルベロスの一族の例に漏れず甘党のオリバーは、兵士から差し出されたバタートーストにハチミツをドバドバと落とし、同じくカフェオレにも見たただけで虫歯になりそうな量の砂糖をぶちまけて旨そうにする。

「ま、百聞は一見に如かずだ」

3つの口で瞬く間に朝食を平らげると、

「ごつつおさん。これ、俺のサイン入れておくから、また服のほう補充しておいてくれ。余った分はチップだ」

小切手にサラサラとサインをし、机の上に放置した。

とりあえず自分のやった事はできるだけ責任を取るし、世話をかけた相手にはこんなふうに気遣いも見せる……この貴族らしからぬ気さくな性格のせいで、オリバーは下の人間からはかなり好かれている。

「あと、とあるヴェイスボウルのチームの練習場所を教えてほしいんだが」

フラグ拡散禁止条例

「ふーん、ここがあいつらの練習場か」

強すぎる日差しに目を細めながら、オリバーはその古いグラウンドのゲートを見上げてつまらなそうに呟く。

ユウたちの練習場であるグラウンドは、スタジアム神殿からもほどちかい、かなり古い神殿の中にあった。

大して広くも無い神殿だが、その小ささゆえに親しみやすく心地よい。

入り口にある、『聖球ヴェイスに導かれ、ドラゴンと戦う9人の勇者達』の浮き彫り彫刻に軽く一礼すると、オリバーは礼拝堂に続く道をそれて中庭になっているグラウンドに足を伸ばす。

むろん、途中ですれ違う聖職者達に色目を使うことも忘れない。

聖球ヴェイスの聖職者は、とくにそういう決まりがあるわけではないが、全て女性のみで構成されている。

したがって、自他共に認める『サカリのついた雄犬』オリバーにとってはまさに天国。

風に流れる雌の香りに、その顔は崩れんばかりに緩みきっていた。

「お、やってるな」

やがて薄暗いゲートを抜けると、まぶしい芝生の緑が目に入る。

そのさらに向こうに広がるのは、女だらけのまさに桃源郷だ。

ユニフォーム姿もまぶしい乙女達も神への祈りと自らの名誉のために健全な汗を流している。

誰が来たのかと訝しげな視線を向ける彼女達に、オリバーがここ

やかな微笑みを浮かべると、彼女達は恥ずかしげに視線を逸らしたり、あわてて髪を直したりとなかなか初々しい反応を示した。

まあ、そのなかの多くは計算ずくのあざといアピールだとは思いますが……

内心ぼやきながら、めばしい相手を物色する。

当たり障りのない挨拶をしながら、オリバーが敵情視察をしにきたことを告げると、乙女達はまるでえさに食いつくピラニアのように、オリバーを十重二十重に取り囲んで質問攻めにした。

モフほどの有名人ではないにしろ、オリバーもまた精悍な顔立ちの男であり、おまけに貴族の次男坊とくれば、これは彼女達にとってまたとない優良物件に違いない。

オリバーからしてもこのチームの選手達はかなかなの粒ぞろいで、本命を誰にするか正直決めあぐねていた。

そんな中、不意にミットにボールがぶつかる音がする。

「ほう？ あれが向こうのエースか」

音のした方向を見ると、見事な巻き毛の金髪美女が、キャッチャーの女性を相手に投球練習をしている。

スピードといい、球筋のキレといい、オリバーの見てきた中でもかなり上位の選手だ。

その体からは真紅のオーラが立ち上り、見惚れるような美しいフォームで剛速球が放たれる。

彼女の体から溢れるオーラこそ、この世界からドラゴンを駆逐するために神から与えられた力『野球力』だ。

炎や雷、自らの能力上昇など、ほぼ万能に使用できる便利な力ではあるが、その効果が発揮されるのは『野球』に関わる事に限られる。

つまり槍や剣に魔力を込めることはできないが、木製バットに熱血力を注げば、それはドラゴンの鱗をも打ち砕く必殺の武器になれるのだ。

そのエネルギー源は自らの情熱であり、血の滾るような怒りや恋の葛藤等もこれに含まれる。

ゆえに、一般的には『熱血力』と呼ばれていた。

金髪美女は、その烈火のごとき怒りを見事に熱血力へと変換し、一流選手でも手を出しかねるほどの凄まじいストレートを叩き込む。それを受けるキャッチャーもまた、自らの感情をエネルギーとして、ミットにエネルギー緩衝フィールドを作り出して、その恐るべきエネルギーを軽々と受け止めていた。

あまり噂になることも無かったチームなのでほとんどノーチエックだったが、これは油断すると痛い目に会うぞ……とオリバーは意外な好敵手の存在に笑みを浮かべる。

だが、何度かその投球を見るうちに、オリバーはあることに気がついた。

「あーあ、馬鹿な事してやがるぜ」

そう呟くと、彼は無言で取り巻きの女性達を掻き分け、マウンドに向かい歩き出した。

- - - - -

「まったく腹ただしいつたら」

両手を鳥の羽のように広げ、荒ぶる幽体のポーズと呼ばれる姿勢をとると、アエラはその身を焦がす怒りを熱血力に変換する。

「ありませんわっ!」

そのままエネルギーを肉体強化と炎に変え、獲物を狙う蛇のような鋭いフォームでオーバースロー。

ズドン……

まるで流星のような剛速球が、外郭ギリギリのコースを描いてミットに吸い込まれる。

そして同時に右肘を襲う鈍い痛み。

先日の練習中から気になりだした痛みは、球を投げることに痛みを増している。

だが、

「ここで、ここで引くわけにはいきませんわ！」

たとえ怪我が原因とはいえ、エースの座に他の誰かがつくのは、到底受け入れがたい屈辱である。

その心の奥から湧き上がる執着を熱血力へと変換し、アエラは大きく振りかぶり……

ガシッ

その腕を誰かが捕らえた。

「な、何ですの、貴方は！？ その手を離しなさいっ！ 痴漢で訴えますわよっ！！」

「何かんがえてやがる！」

アエラの腕を掴んだ男は、開口一番いきなり怒鳴りつけた。

「は？」

あっけに取られたアエラの腕を放し、男はアエラの目を真っ直ぐに見つめてため息をついた。

「見ればわかるんだよ。お前、その肘、痛めてるだろ」
びくっ

アエラの体が、一瞬硬直する。

「言いがかりつけないでくださいましっ！」

即座に否定するが、男の目を真っ直ぐみてもらえない。

「気付いているか？ おまえ、投げるとき無意識に肘かばってんだよ」

顔を掴んで無理やり真っ直ぐに向けさせると、

「そんな腕で試合に出るつもりか？ 笑わせるな」

男はニヤリと笑ってこう告げた。

体の震えが止まらない。

このままでは、自分の怪我がバレてエースの座を下ろされる！？

「お、お願いですわ！ このことは誰にも……」

真っ青になって嘆願するアエラに、オリバーはさらに深くため息をつく、ゆっくりとした口調で諭すように語りかけた。

「おまえな、もうちょっと先のことを考えろよ。今年ピッチャーとして活躍する事ができなくても、来年エースに返り咲くことは可能かもしれないだろ。こんな事で未来を台無しにする奴があるか！」

そこでチラリと後ろを向くと、アエラの様子がおかしいことに気付いたキャッチャーが慌てて駆け寄ってくる場所だった。

「あと、そのキャッチャー。相方のコンディションぐらいきっちり把握してお……け……」

近づくにつれて、オリバーの目がハート型になる。

……すげえ、モロにタイプだ。

キツめの眼差しといい、背中まで伸びる長い黒髪、小さくキュッとしまったお尻なんて、いますぐ飛びついてしまいたい。

どれをとつてもオリバーの好みのストライクゾーン。
頭の中で神の使いがラッパをかき鳴らし、汗の中に混じる女の香りに目の前がクラクラとする。

……こいつは、絶対にモフの奴と喧嘩になるな。

ツバを飲み込みながら、ひそかに胸のうちでそう呟く。

実はオリバー、かつてモフとは女を取り合つて殺し合い寸前の喧嘩をしたことがあるほど女の好みが似通っていた。

もし、次の試合で試合に勝利したとき、彼女を取り合うことは目に見えている。

なんとしてでも、ヤツを出し抜く方法を考えなくては。

ふとそこで、オリバーはこの美女になんともなく見覚えがあることに気がついた。

「アエラ、何があつたの？ ……ちょっと、その魔族の人。あたしの相方に変な事してないでしょうね！ って、あら、昨日の？」
美女の方も、オリバーに気付き目を丸くする。

「えーっと、たしか昨日飲みに行った店で……」

「わーっわーっ、待って！ それは内緒……」
確認するように呟くオリバーの口を美女が慌てて塞いだ。

昨日失恋してクダをまいていた女が、まさかこんな美女だったとは……関わりたくなかったからモフの奴に押し付けて逃げてきたのだが、もつとちゃんと顔を見ておけばよかった。

「ね、ねえエレン。あなた、このお方とお知り合いなの？」

アエラがなぜか目を合わせずにモジモジとしている。

その顔を見た美女……エレンは、一瞬目を丸くした後、ニヤリと

意味ありげな笑みを浮かべた。

「あ、彼？　昨日飲みに行ったときに隣に座っていただけよ？」

獲物を目にした猫のような目を見ると、エレンはアエラの肘を突付いて、ボソボソと小声で囁く。

「なに、とうとうアエラにも気になる人ができたってわけ？」

「ち、違いますっ！　あなた、なんて破廉恥なことを！？」

とたんに、瞬間湯沸かし器のごとくアエラの頭から湯気がのぼる。「あら、気になる人って言うのはそういう意味だったのね？　天下のアエラ嬢が、まさかそんな破廉恥なことをお望みとは」

「あ、あ、あ、あなたと言う人は！？」

激昂しすぎて頭に血が上ったアエラの体が、グラグラと揺れ始め、ふうっ……そう息を吐き出すなり、まるで糸の切れた操り人形のよう

うに崩れる。

「お、おいっ！？」

慌ててオリバーが体を支えてやると、アエラは頬を主に染めて、

「す、すいません。　つい興奮してしまっ……」

伏せた目がキラキラと輝いている。

「と、ところでユウって奴がこのチームにいると思っただが、どこにいったんだ？　見かけないんだが」

本能的な危険を感じ、オリバーがここに来た理由を切り出すと、

「あ、あなたのユウが目当てだったんですの？」

ムツとした顔でアエラが上目遣いに睨みつける。

「いや、俺の親友が、そのユウってやつにこっぴどく振られたみたいなんで、どんな奴か顔を見に来たんだが、姿が見当たらなくてな」
居心地が悪そうに頭を掻くと、オリバーは逃げるようにアエラの傍から離れた。

「ユウが？ まあ誰かと付き合うとは思えないけど、そんな酷い事言う子じゃないんだけどな」

そのオリバーの台詞に、エレンが首をかしげる。

実は男であるユウが、男と付き合うはずは無いと知っているものの、毎回断りにくくて四苦八苦している姿を知っているだけに、オリバーの台詞とイメージが結びつかない。

誰かと勘違いしたのではなからうか？

だが、その思考はアエラの思わぬ発言によって遮られた。

「ずいぶんと下世話ですね。……あの人なら、練習もせずにデートですわ」

「デート！？」

スネたような口調で放たれた言葉に、エレンとオリバーは同時に同じ台詞を口にした。

「そ、そうですわ。 エレンが練習場に来る前に、黒猫の魔族の方に連れられて練習場の外に出かけましたわ」

二人の予想を超える食いつきに若干引きながら、その時の様子を出す。

「たしか、クリスとか名乗ってましたかしら」

「クリスだとお！？」

その台詞にオリバーがさらに驚愕する。

女性にまったく興味を示さず、同性愛者の噂すらある氷の魔王がデート……臣下にとっては、驚天動地の出来事である。

「どうかなさったの？」

気味の悪いものを見るような口調でアエラが尋ねると、

「いや……ぶぶぶ……そうか、こいつは面白くなってきやがった」

オリバーは、口元を押さえてニヤニヤと笑い出した。

「なんだか癪にさわる方ね。 一人で面白がって悪趣味ですわ」

「そ、そうよ！ あんたウチの妹の恋路を邪魔する気？」

エレンが青い顔で非難を浴びせる。

よくよく考えると、まずい。

ウチの弟が男だとバレたら、魔王の怒りを買うのは必定。
真実が露見する前に、なんとしてでも止めなければ……

エレンは内心気が気ではなかった。

「いや、まあ聞けよ。こいつが傑作でな」
そんなことを知らず、オリバーは一人面白そうに語りだす……

数分後、神殿を抜け出したオリバーの後ろに、二人の人物がついてきていた。

なんのことはない、エレンとアエラの二人である。

「で、こっちの方角に歩いていったんだな？」
魔獣化したオリバーが尋ねると、アエラは無言で頷く。

それを確認し、オリバーは地面に鼻をこすりつけるようにして臭いを嗅ぎ始めた。

「さてと、ではいっちょストーキングとしゃれ込みますか」
後ろの二人にそう声をかけると、オリバーは繁華街の方角へとゆっくり追跡を開始した。

カップルは爆発するべきか否か

その頃、ユウとクリスはと言うと……

「あの、クリスさん。暑いから離れませんか？」

蝉の大合唱が響く街の表通りを、腕を組んで歩いていた。

いや、正確には顔を真っ赤にしたユウを、満面の笑みを浮かべたクリスが引きずっているというべきか。

やや汗ばんだ肌の感触がもろに伝わり、なんともいたたまれない気恥ずかしさを掻き立てる。

「君と一緒になら、地獄の炎に焼かれても私は構わないが？」

臆面も無くそんな恥ずかしい台詞を口にするクリス。

またその台詞が似合うのだから、なんとも始末が悪い。

「その……困ります」

その堅く抱きしめられた肘をイヤイヤと振り、何とか逃れようとしながら、ユウがさらに苦言を申し立てる。

「何か？」

「こんな昼間から、異性の方と腕を組んで歩くなんて、はしたなくて……」

顔を俯かせたユウを、まぶしいものを見るような目で眺めながら、クリスは笑った。

「なんだ、そんなことか。みたまえ周囲を」

「ひ、向日葵の花が綺麗ですね」

クリスの言葉にユウは、乾いた風に揺れる向日葵の法を向いてそう答えた。

「違っだろ。目をそむけるな、ユウ」

仕方ないなといわんばかりの顔で、ユウの顔を向かいの通りの法へ強引に向き直らせる。

その手の指し示す方向には、休日を楽しむカップルの群れ。

ヴェイスボウルの行われる7月から9月までの三ヶ月は、まさに恋の季節……休みに街へと繰り出せば、そこはカップルだらけの光景が広がっている。

一人身にはなんとも目の毒な季節だ。

「ちょ、ちよつと目の毒ですよ」

中には同道と公衆の面前でキスをするカップルもあり、ユウにとってはまさに目のやり場も無い状況だ。

「あれぐらい、なんともないぞ」

歯を白く光らせて笑うクリス。

「なんだったら、私達もキスを試みるか？ 初めてだから巧くは

ゆかんかもしれんが、そのあたりは許せ」

こちらにも性別を偽った生活をしていたために恋愛経験は皆無なのだが、信じられないぐらい堂々としており、しかもかなり強引だ。

「だ、ダメっ！ まだ、まだボク達に早いですっ！」

「ユウは私のことが嫌いなのか？」

密着した胸を押しつけるユウの腕に、自らの手をそつと押し当ててクリスは眉をくもらせる。

「そ、そんな悲しい顔をしてもダメですよ、魔王陛下。恋愛には、ちゃんと順序というものがあってですね」

「悪い。私は待てない性格なんだ」

唇をニイツと吊り上げて、そのままユウの体を手近な壁に押し付ける。

「ひやあつ!？」

そのまま顔を寄せて唇を奪おうとしたが……

ビィッ

何かか裂ける音と共に、クリスの顔が硬直する。

「ま、まずい」

冷や汗をかきながら、背中に手をやるクリス。

「どうしたんです？」

訝しげにその顔を覗き込むと、クリスは苦々しい顔でその理由を口にした。

「サラシがずれた。どこか近くに喫茶店はないか？ お手洗いでサラシを巻きなおさないと胸が……」

「うわっ、それまずいじゃないですか！ あ、あっちにたしかカフェがあったはず。しっかりしてください！ そこまでゆけばどうにかかりますっ!！」

お互いにしか聞こえない程度の声で語り合っていると、ユウとクリスは、ずれかかったサラシを固定するかのよう、ピッタリと体をくっつけあつて歩き出した。

その様子は、傍から見るとただの馬鹿ツプルにしか見えなかったが、当人たちは顔面蒼白で必死の形相である。

「な、なかなかよい店だな」

ユウに案内された店は、色使いこそ控えめではあるが、ところどころに愛らしい動物や植物のレリーフの施された、かなりお洒落なカフェレストランであった。

味気ないユニフォーム姿では入るのが躊躇われる場所だが、緊急事態ゆえやむをえない。

「ほんととは、こんな時に来る店じゃないんですけどね」

ユウもまた、ため息をつかんばかりの表情で玄関のアーチを見上げると、意を決してドアをあけた。

カラン、カラン、カラカラ……

涼やかなドアベルと共に飛び込んだ店内は、見渡す限りカップルの群れ。

あまりにも場違いな自分の格好に、一瞬回れ右をしたくなる。

もつとも、店内の客は自分の相手とのおしゃべりに夢中になっているため、こちらに視線を向けることは無かった。

「最近人気のデートスポットなんですよ、ここ」

ボソリと呟くユウの顔は、こころなしか残念そうだ。

「そうか、では次はもつと違う機会に利用させていただこう。香

りからして、品揃えも悪くはなさそうだ」

普段高級品ばかり口に行っているクリスの口に、この店のメニューが合うとは思えなかったが、なにもデートは店の味で決まるものではない。

ようは雰囲気と思い出だ。

「とりあえず、席を決めて何か頼みましょう」

あいにくここは公衆トイレではないのだから、このまま何も注文しないというわけにはゆかない。

こちらにやってきたウェイトレスに席を案内されると、二人は適当な注文をすませ、クリスはサラシを巻きなおすためにそそくさと化粧室に消えていった。

ガコン、ガランガランガラン

それと入れ違いぐらいのタイミングで、突然店のドアが荒々しく

開け放たれる。

「な、何事っ!?!」

驚いたユウが目を向けると、体格のいい魔族の男ばかり10人ほどが、不機嫌を隠そうともせず、にぞろぞろと店の中に入ってくるころだった。

「ハッ、真昼間からみなさんいいご身分ですねえっ!」

男達の一人が店内の客を見回し、酒臭い息を吐きながらなりたてる。

濃厚なトラブルの気配に、店内に総毛立つような緊張感が走った。そして誰もが、息を殺してこの突然の嵐をやり過ごそうとする。

「俺らにもちよいとその幸せ分けてくれよ!」

別の男が、目を血走らせながら、客の女性の腕を取った。

女性が助けを求めてつれの男性を見るが、その魔族の男性は、突然の成り行くと、男達の雰囲気、気圧され動けないで居る。

「お、お客様、困りますっ! 店内ではお静……」

「あー? なにー 聞こえねーな。 もっとよく聞こえるように、続きはベッドの中で教えてくれねーか?」

いさめようとしたウェイトレスの腕を取ると、男は無理やりに彼女を抱き寄せた。

「い、いやああっ! やめてくださいっ! やめてえっ!」

「このお皿、おいくらですか?」

不意にユウは、傍らでガクガクと震えているウェイトレスに声をかけた。

「えっ?」

その落ち着き払った声に、聞き返すウェイトレスがかえって混乱する。

「……ヤン・キース窯製、赤絵皿。セツト物だし、皿だけでも40セリグぐらいかな。間違っていたらごめんなさいね」

そう告げるなり、ユウはザラリと4枚の10セリグ銀貨をテーブルに置き、そのコーヒー皿を手に立ち上がる。

1セリグ貨はだいたい500円程度感覚だ。

「あーもつたいない」

呼吸を整え、体の奥底から湧き出る怒りを熱血力に変換する。

そしてそのまま大きく振りかぶり、

「……くらえ、デッド・ボール！」

技の名を叫ぶと共に狼藉を働く魔族たちめがけて皿を投げつけた。

それはかつてドラゴンと戦うために編み出された格闘術、攻式野球の技であり、熟練者ならばドラゴンの鱗すら砕くといわれる必殺の一撃だ。

がっしやー！ーん！！

真紅の輝きを纏った皿が、唸りを上げて魔族の頭を直撃する。

……ただし、狼藉を働いていた男ではなく、横で彼女の不幸を見ているしかできないヘタレ男の方を。

「あっちゃー またコントロールミスっちゃった」

ピッチャーとしてのユウの欠点……それは、熱血力をつかうとコントロールが極端に悪くなり、なぜかデッドボールを連発すると言う致命的な癖だった。

それさえクリアすれば正選手も夢ではないのだが、いまのところ

直る気配は無い。

どすつ。

男が音を立てて地面に倒れると、連れの女が真っ青な顔で駆け寄った。

「きゃあああつ！ 救急者、だれか救急者を呼んで！！」

慌てて治癒魔術の術者を呼びに店の人間が走り出す。

「な、なんて酷いことを！？」

さすがの酔漢たちも、一気に酔いが冷めたらしく、一気に非難の眼差しをユウに向ける。

「いや、あの、これはですねえ……」

自分のやってしまった事に、ヨウが見事な拳動不審ぶりを見せ付けていると、

「あ、この女だ！ この女がユウだよ！！」

酔漢の一人が、ユウを指差して急に騒ぎ始めた。

その顔に見覚えはなかったが、おそらく先日のスタジアム神殿での乱闘事件に参加していた者だろう。

「なにっ？ こいつが今年ヴェイスボウルに参加できなくなった原因の女なのか？」

他の男達も、眉間に皺を寄せながら、ユウに視線を向ける。

「そつだ。 こいつが、俺達のチームと試合をするのを渋ったせいで、モフ將軍に睨まれるハメになったんだよっ！！」

「あ、あれはあなた達が勝手にやったことじゃないですか！！」

思いつきり逆恨みなのだが、言って話を聞くような輩なら、最初からこんな理不尽な事はしないだろう。

「や、やかましい！！　おい、ここであつたのも何かの縁だ。　俺達の不満を、その体で償ってもらおうじゃねえか」

恥知らずではあるが、逆恨みの自覚はあるのだろう。

顔を真つ赤にして怒鳴ると、どんな縁だかは知らないが、下卑た顔で舌なめずりをし、さらに理不尽な事を言い始める。

その台詞に同調するように、他の男達もいやらしい笑みを浮かべながら、ジリジリとその包囲網を狭め始めた。

「や、やめてくださいっ！！」

伸ばされた手を振り払いながら、ユウは逃げ場のない状態に焦りを見せ始める。

せめてここにクリスがいなかったことが救いだ。

彼女に何かあれば、ユウは自分自身が許せないだろう。

……兵士達はまだか！？

この暴漢たちに手を出せば、自分達もただでは済まない。

周囲の魔族たちは、ユウに助けを差し伸べる事で自分に被害が及ぶことを畏れて、ただ遠巻きにこちらを見ているだけだった。

なんとかして、兵士がくるまで時間を稼ぐしか、ユウに残された手段は無い。

だが、

「鬼ごっこも隠れんぼも無しだ。　今日俺達の遊びに付き合ってもらうぜ」

孤立無援となったユウの腕を強く握り締め、暴漢がニヤリと笑う。

ユウの顔に、絶望が広がった……

- - - - -

「ユウ、待たせたな。なにやら騒がしかったようだが」

化粧室から出てきたクリスを待っていたのは、なんともいえないくらい雰囲気包まれた店内だった。

所々に破損した椅子が転がり、その周囲には砕けた食器が散らばっている。

「ユウ!？」

その竜巻でも通り過ぎたような光景の中に、思い人の姿が無い事に気付き、クリスの顔に言い知れぬ恐怖が浮かぶ。

ぽんっ

突然クリスの肩に、誰かが手を乗せた。

「だ、誰だ!？」

慌てて振り返ったクリスの背後にいたのは、クリスのチームメイトであるオリバーだった。

その後ろには、泣き濡れる黒髪の美女と、こわばった顔をしている豪華な赤い巻き毛の美女が寄り添うように立ちすくんでいる。

そしてオリバーは、沈痛な表情を浮かべると、クリスに向かってこう告げた。

「そのお嬢さんなら、さつき男共に拉致されたいらしいぜ」

「ど、どういふことだ!？」

クリスの目が驚愕に見開かれる。

「どうもこうもねえよ。酔ってカップルに嫌がらせをしに来た酔っ払い共が、腹いせに拉致して行ったらしい」

そう言いながら、かけつけた治安維持担当の兵士たちにオリバーは矢継ぎ早に指示を出した。

「こうしてはいらんっ！」

クリスが慌てて店を出ようとするが、その肩をオリバーがシツカリと掴んで離さない。

「離せ、オリバー！ 私は急いでいる！！」

その手を振り払おうとするクリスだが、オリバーはその目を見下ろし、「何か勘違いしてないか？ 陛下。 あんたは、そこの安っぽいヒーローみたいに単独で犯罪組織に突っ込んでいい人じゃないだろ？ そもそも、魔王のあんたが共もつけずに平民と昼間っからフラフラであるいていいとも思ってるんですかね？」

不機嫌を隠そうともせずにイライラとした口調でクリスに語りかけた。

その後ろでは、聞き耳を立てていた二人の美女……エレンとアラが、魔王という言葉に反応してポカンと口をあける。

まさか自分のチームメイトが、魔王とデート中だったなんて、何か悪いジョークのようだ。

「だが、しかし！」

その周囲の反応を他所に、まなじりを吊り上げて不満を唱えるクリスの顎を、オリバーは片手で掴んですこし持ち上げる。

そして、冷酷とも思える眼差しを向けて小さく恫喝の言葉を口にした。

「あんたが動いて何ができるんだ？ 物語のように、さらわれたお姫様の行方を教えてくれる魔女のババアはここにはいないんだぜ？」

その視線に耐えかねたように、クリスは横を向いた。
奥歯をギリギリと軋ませ、手をギュツと握り締める。

「じゃあ、私にできることは何も無いのか？」

そして、呼吸を整えたクリスが拗ねたようにそう呟くと、オリバーはニヤリと笑ってこう告げた。

「いいや、あんたにできる事はたくさんある。　まず、魔王の名においてこの事件の捜査をやりやすくしてくれ。　事件を起こした魔族は、おそらく貴族の類だろうから、妨害が予想される」

その言葉にクリスは深く頷く。

「わかった。　捜査の際には私の名を出せばいい。　続けてくれ。他には何ができる？」

まるで物分りの良い生徒を見るめで頷くと、オリバーは少しナナメに視線を抜けてからこう告げた。

「次は、モフ將軍を呼び出してくれ。　どうも犯人は、少し前にモフのヤツとなにやら揉め事を起こしたらしい」

「モフが……？　わかった。　すぐに手配しよう」

意外な人物が出てきたことに少し怪訝な顔をするものの、オリバーがこんな時に嘘や冗談を言うはずも無いと思いなおし、クリスはそれを了承する。

「そして最後だが……　無礼な言動の数々、平にご容赦いただきました。　魔王閣下」

その言葉と共に、オリバーは膝について深々とクリスに頭を垂れた。

王への深い敬意と忠誠を感じされるその姿は、まさに側近の鏡と言っべきか。

「許す。　貴殿は最良とはいわぬが、最善の手を打ったと思う」

その頭の上に手を当て鷹揚に頷くと、クリスはオリバーの行動をそう評価した。

「ありがたき幸せ」

顔を伏せたままそう告げると、オリバーは携帯を取り出して、親

友を呼び出すためにアドレスのリストを開いた。

そして相手が電話に出たことを確認すると、昨日の電話の仕返しとばかりに、

「おいこらそのボケ親友。 我らが王から緊急のお呼び出しだ。

10分以内にこないと便所掃除を仰せつかるぞ」

と、一方的に用件を次げて電話を切った。

契約はよく読んでからにしましょう

気が付くと、そこは埃っぽくてほの暗い場所だった。

「ここは……廃墟？」

目が覚めたユウは、誰に聞かせるわけでもなく、かすれた声でそう呟く。

その呟きに反応したように後ろから悪意を帯びた声がした。

「惜しいな。ここは廃工場というヤツさ」

振り向けば、むやみやたらとトゲのついた^{いか}鋭つい魔族がこちらの様子を窺っていた。

その飢えてギラつく目と茶色の毛に覆われた耳、小柄だがどこか凶暴な雰囲気を感じさせるシルエット。

おそらくジャコウネコかハイエナあたりの力を受け継ぐ魔族だろうか？

陰になっていて顔はよく見えないが、ユウを拉致した男達の仲間であることは間違いない。

ユウは、心の中でこの男を”ハイエナ男”と呼ぶことにした。

「ボクをどうする気ですか？」

そう尋ねながら、体のあちこちを確かめる。

逃げられないとタ力を括っているのか、手足を縛るものは無い。

服も破れたり脱がされたりした跡は無いし、とりあえず貞操の方は無事なようだ。

「さあな。そいつは勝ち残ったヤツに聞いてくれ」

ハイエナ男は横を向くと、ユウの質問に対する答えを不機嫌そうに吐き捨てる。

ふと、窓から差し込む光がハイエナ男の顔にあたり、殴られた跡があることに気付く、ユウは目を見開いた。

「怪我……？」

よくよく感覚を研ぎ澄ませると、周囲の空気に鉄臭い匂いが混じっていることに気付く。

これだけ血の匂いが濃いのなら、おそらく傷を負っているのはこの男だけではあるまい。

ここでいったい何か行われているというのか？

「はっ、笑いたければ笑えよ。俺はどうせあぶれ組だ」

ユウの視線を侮蔑と受け取ったのか、ハイエナ男は皮肉げに口をゆがめて笑う。

その目に渴望にも似た暗い熱を感じ、ユウの背筋に虫が這いよるような悪寒が走った。

「何が起きているのかわからないって顔だな。いいだろう、教えてやる」

ユウの反応に満足したらしく、ハイエナ男はニヤニヤしながら頷くと、ユウの目を覗き込みながら聞きたくも無い情報をユウの耳に流し込む。

「他の連中は、お前を最初に陵辱する権利をかけてバトルロワイヤル形式の乱闘中だ。お前を仲良くみんなで食べようって気は端から一人も持ち合わせていなかったらしい」

なんとも浅ましいその行動を、ハイエナ男は実に楽しそうに語りだした。

貪欲と言う罪の、業の深さを見るようで、胃のあたりに酸を流し込んだ痛みが走る。

しかも、その欲望の矛先が自分だというのだから悪夢としか言い

ようが無い。

「どうだ？ 満足か？ お前一人のせいでたくさんの人間がこのザマだ」

そう言いながら、ハイエナ男は手近にあったハンドライトをつけて、部屋の隅を照らし出した。

そこには、魔族の男達らしき人影が4〜5人ほど転がってる。

先ほどから強く臭う血の香りは、彼らから漂ってきたものだった。幸い死人は出ていないらしく、耳を澄ませば時々悲痛なうめき声が聞こえてくる。

彼らが貪欲なせいでユウの純潔が保たれているわけだが、こんな無残な有様を見せられてなお素直にそれを喜べるほどユウの神経は太くなかった。

ユウの顔がさらなる苦痛に歪むと、ハイエナ男はたまらないとばかりに目を血走らせ、唇から唾液を滴らせながら手を伸ばしてくる。

だが、その手はユウの目の前で停止する。

制約のせいだ。

この国に与えられた属性『野球』の力は、つきつめると2つの要素から成り立つ。

一つは感情を別のエネルギー変換するという要素であり、もう一つは規則ルールという制約を受け入れることで特定の力を得るという側面だ。

ゆえに、一つの争いを『スポーツ』として定義してしまえば、それに参加した者に一定の制約を与えることができる。

たとえば、この争いの敗者はユウに手を出すことができない……と言ったように。

そして制約が提示された時に自らその制約を受け入れた以上、い

かに強靱な精神力を誇る者でも、自力でその制約を破ることはできない。

ハイエナ男は諦めて手を引つ込めると、苛立ちをぶつけるために近くにあつた空き缶を蹴り飛ばした。

ガンツ……鈍い音と共に壁にたたきつけられた缶が、ひしゃげてユウの足元に転がる。

まるでハイエナ男の貪欲なオーラが染み付いている気がして、ユウは虫の死骸を避けるようにその金属の残骸を遠くへと蹴り飛ばした。

その嫌悪に眉を寄せた顔を眺め、

「くくく……いい顔で怯えやがる。制約さえなければいます

ぐその綺麗な顔を踏みにじつて俺の……」

聞くに堪えない卑猥な台詞が次から次へとハイエナ男の口からこぼれた。

嗜虐趣味……幸い、ユウはいままでそんな異常性癖の持ち主に遭遇することはなかったが、この男はまさにその異常な性癖をむき出しにして、ユウの苦痛をむさぼろうとしていた。

制約がなければ、どんなことをされていたかと思うとぞっとする。

だが、このままでは別の誰かにもつとひどいことをされるかも知れない。

何よりも、自分の体は彼らにもてあそばれるようにはできていないのだ。

「ボクと勝負をしませんか？」

意を決すると、ユウはハイエナ男にそう提案を持ちかけた。

「勝負？」

不意に突き出された、予想外の反応に、ハイエナ男は眉をしかめる。

「ええ、貴方が敗れた戦いにはボクの同意がありません。だから、ボクの同意した勝負の制約のほうが優先されます」

ユウの説明を理解すると、ハイエナ男は見ているだけで寒くなるような笑みを浮かべた。

「……話を聞こうか」

ユウの提案に心引かれたハイエナ男が、話の先を促す。

その蛇のような顔を睨みつけながら、ユウは震えそうになる足を踏ん張って、自らの提案を告げた。

「鬼ごっこをしましょう。ボクが逃げ、貴方がボールを持って追いかける。貴方がタッチアウトできればそこでゲームセット」

それは、野球のランナーと守備のやり取りを歪めた制約の儀式。軽い約束を一度守らせる程度の効力しか持たない術だが、ハイエナ男の制約を上書きし、その目的を叶えるには十分な力を持っていた。

「面白い。無論、俺が勝てばお前を自由にさせてもらう。そっちの勝利は何だ？」

いうまでも無いが、この勝負、施設の内部構造を知らないユウが圧倒的に不利である。

勝利を確信したハイエナ男は、暗い喜悦を顔に浮かべた。

「ボクの勝利条件は、ボクが無事にこの施設の外の土を踏むこと」
ユウが外に出れば、ハイエナ男はユウに手を出すことができない。
なる。

少なくとも、ユウのことをこれ以上追いかけてようとしても気力が沸かなくなるだろう。

「よかるう。我々は、聖球ヴェイスと選手宣誓にのっとり、正々

堂々戦うことを誓う」

この儀式を受け入れたことをハイエナ男が宣誓すると、ユウもまた同じ言葉で誓いの言葉を告げた。

そして……

「では、貴方は20分の間ここから動くことはできない。その時間を得ることは、ボクが逃げるために必要な正当な権利であるっ！」
宣誓が終わった後にルールを持ち出した。

「なっ！？ 貴様、卑怯だぞ！！」

ハメられたことに気付いたハイエナ男が、目を血走らせて手を伸ばすが、その指先はユウに触れる前に硬直する。

自らが制約を受けているために、抵抗すればするほど拘束の力は強まるばかり。

「勝負をするなら、先に細かくルールを定義するべき。ヴェイスボウルのプレイヤーなのに、そんなことも知らないんですね」

パンパンと膝についた砂を払うと、ユウは笑ってハイエナ男を振り返った。

「だから貴方は三流なんですよ。顔を洗って出直してきてください。ああ、心は洗わなくていいですよ？ 河川が汚染されちゃうのでお魚さんに迷惑です」

それだけ告げると、ユウは足早にその場を後にした。
周囲で転がっていた別の男達が、ゆっくりと体を起こし始めたからだ。

少なくとも、この工場の外に出るまでは安心できない。

そう心の中で呟くと、ユウは建物の外に出てすぐに足元の石を拾い上げた。

呼吸を整え、この廃工場にいる男達への怒りを意志の力へと変換する。

力を手足にゆつりと巡らせ、十分なエネルギーが溜まった事を確認すると、腕を大きく振りかぶり、空に向かって思いっきり石を投げ上げた。

ズドン!!

真っ白なオーラに包まれた小石が、轟音を立てて空高く打ち上げられる。

「……姉さん、これで気付いてくれるかな？」

今頃、姉が自分を探しにあちこちうろついている頃だろう。

あの男勝りな姉が、兵士に捜査を任せて大人しくしているなんて、とても考えられない。

だが、向こうのほうで争いを続けている男達も、今の合図に気付かないわけが無い。

一刻も早くここから離れなくては……

ユウは、表情を引き締めると、出口を求めて、いくつもの建物が立ち並ぶ廃工場の敷地の中を走り出した。

- - - - -

その光は、町外れの丘の向こうから、天と地を繋ぐ細い糸のように白く上に向かって伸びる。

エレンは目を細め、それを睨むようにして確認すると、頷いて仲間を振り返った。

「ユウのオーラに間違いないわね。　なんとか合図を送るだけの余裕はあったみたい」

熱血力によって生み出されるオーラはその人によって異なり、ユウのそれは純白。

さらにそのオーラの帯びる波長が個人によって異なるため、家族や親しい友人ならば声を聞き分けるように個人を特定することができる。

ユウがあそこにいる……

その報告を聞くなり、クリスの目に鬼火のような火が灯った。手をぎゅっと握り締めると、魂が引きちぎれそうなほどの激情を抑えながら、自分の跨っている騎獣に声をかける。

「オリバー、ご苦労だがこのまま目的地まで走ってくれ。　時間が無い」

苛立ちを帯びたその声に、3つ首の獣がため息をついた。

「はいよ。　まったく、我儉な王様だ。　けど、こういうときこそ焦りは禁物だといっておくぜ？」

軽口で答えながら、大型バスよりも巨大な体を震わせ、その背中に4人もの男女を乗せたまま、街外れへと続く広い公道を軽やかに疾走する。

ユウ奪回のために集まった面子は、総勢5名。

臭いによる追跡と移動手段として優秀なオリバー、救出作戦の指揮を執るモフ、ユウの姉でありオーラを識別できるエレン、それに無理やりついてくるような形でクリスとアエラが一緒に来ている感じだ。

「この方向には、たしか大きな工場の跡があったな」

オリバーが、状況を確認するかのようにふとそう漏らす。

周囲の風景は、店の立ち並ぶにぎやかな通りから、畑や牧場の間に工場が点在するような寂れた郊外にかわりつつあった。

「周囲に人目が無いのは助かるな」

同じように周囲を見回して、モフが安堵の息をもらす。

「なあ、モフよ。　なんでこの事件、ここまで隠密裏に進めなきゃならんのだ？」

その台詞に対し、納得できないと言わんばかりの表情で、オリバーが首の一つをモフに向ける。

「聞くな。　言えるような事情ならとくに話をしている」

だが、モフはその問いに答えることは無く、もどかしげな表情を浮かべて首を横に振るだけだった。

ユウとクリスの本当の性別を知るこの男は、事情の説明を聞くなり、軍の兵士を動かさずに、できるだけ少人数で救出に向かうことを提案した。

万が一ユウの性別が露見した場合に、情報漏洩を防ぐ必要があるからなのだが、事情を知らない者からすれば、『何を考えているんだこいつ？』である。

当然ながらオリバーから猛烈な抗議を受けたが、モフは頑として譲らず、最後にはほとんど喧嘩になりかけたのだが……

最後にはクリスとエレンからの嘆願もあり、オリバーは渋々折れた。

結局、詳しい理由は告げられないままだ。

やがて一行の目に、巨大な廃墟が見えてきた。

その表面を覆うセメントは水垢で黒く変色し、不気味なことこの上ない。

さらに、カラスの群れが鳴きながらその上を飛び交う様は、まる

でホラー映画のワンシーンのようだ。

抜けるような夏の空も、かえってこの地を覆う影をクッキリと際立たせてしまっている気がしてならない。

「なんというか、あそこが入り口だな」

その壁の切れ目部分には、おそらく守衛の詰め所だったであろう小さな小屋が建てられており、その周囲を人相の悪い魔族たちが何人もうろついている。

カラスが上を飛び交っているところを見ると、誰かがあの場所で食事をし、その食べ残りが散らかっているのだろう。

「どうする？ 先制攻撃で殲滅がいいと思うんだけど」

背中に背負った木製バットを引き抜きながら、エレンがそんな提案を口にする。

「物騒だな。 まあ、その可能性は高いと思うが、ここはまず交渉させてもらおう。 荒事は最後の手段だ」

苦笑いでエレンを制しながら、モフは一人前に足を踏み出す。

「ヤバイと思ったら、そっちの判断で行動してくれ」

モフが残りの面子を見回すと、しゅしゅ全員が深く頷いた。

それを確認した後に、

「じゃあ、行ってくる」

モフは入り口にたむろする男達へと足を踏み出した。

たった一人で。

雑魚の屍を越えてゆけ

「よお、お兄さん。ここは立ち入り禁止だ。その綺麗な服が汚れる前にお家に帰りな」

廃工場に近づくなり、いきなり威嚇するように睨み付けてきた男は、モヒカン頭にボディピアス、細身の筋肉質な体に黒い皮のベストを身に付けた、いかにも地下社会の住人ですと言った風情の男だった。

近寄っただけで臭ってくる濃い体臭に、モフは顔をしかめながら口を開く。

「ここに17、19ぐらいのショートボブの女の子がいないか？妙な連中にさらわれて行方を捜しているんだが」

こいつら殴ったら、その身に着けている金属片で手に傷が付きそうだと考えながら、モフはやる気の無い声でそう尋ねる。

「おい、誰か知ってるか？」

モヒカン男が、後ろに控えた仲間にもそう尋ねると、

「いんや、そのお兄さんの勘違いじゃねえのか？」

双子かクローンではないかと思うほど同じような特徴の男達が、ニヤニヤと爬虫類を思わせる笑みを浮かべながら、口々に知らない^{しらない}と囁く。

だが、その馬鹿にしたような表情と口調が全てを物語っていた。

「有益な情報があるなら、代価を支払ってもいいんだが？」

交渉を続けるといった口調で語りかけながら、モフは後ろに手を回し、物陰からこちらを見ているであろうオリバーたちにむけてサインを送った。

手を水平に動かしてから、親指を下に向けて二度振り下ろす。

……やっちまうぞ。

はつきり言つてこれ以上交渉する気はこちらにも無い。

「悪いな、他をあたつてくれ」

予想通り、モヒカン男の後ろから釘バットを構えたモヒカン兄弟
ブラザーズ
がゾロゾロと沸いて出る。

総勢10人程度か？

たいした数じゃないな。

しかも神聖なるバットに釘を打ち込むとは、この罰当たりめ。

「そうか、それはとても残念だ」

相手の人数を推定した上でモフは一言そう告げ、相手と距離をとるべく素早く後退った。

「そうだな、とても残念だ……なつと！」

ブンッ

そう告げるなり、モヒカン男は前に踏み込み、全力で釘バットをモフの頭上に振りかざす。

モフが軽く横に飛んでその一撃を交わすと、モヒカン男とその兄
ブラザーズ
弟はさらに追撃をするべく武器を振りかざして迫り寄る。

が、それよりも早く周囲に通るような女の声が響き渡った。

「宣誓！ 我々選手一同は、スポーツマンシップに乗っ取り、正々堂々と戦うことを誓いますっ！」

「なつ、選手宣誓だと！？」

物陰から聞こえてきたエレンの声に、モヒカンたちは驚き、焦りの声を出しながら歩みを止める。

同時に、不可視の力が押し寄せる波のように、周囲にいる男達を

飲み込んだ。

宣言……それは戦闘を有利に進めるための結界を作り出す攻式野球のスキルの一つ。

結界の中は術者の定めた『ルール法則』によって支配され、そのルール法則から外れたものには罰をペナルティー与えることができる。

「ヴェイスにお願いあげる！ その者、場内乱闘につき、審判を下さんことを！！ レッド・カード退場！！」

さらにその横から、別の女……アエラの声が高らかに響く。

選手宣誓の状態から繰り出される罰の一つ、”ペナルティー退場”の呪文だ。

結界の中で戦闘行為を行った者を束縛し、戦闘範囲外へと強制移動させると言う、ある意味必殺の一撃である。

当然ながら誰にでも使えるような術ではなく、かなり高位の聖職者のみが行使できる高等呪文だ。

「うがつ!？」

逃げる暇すら与えず、たちまち虚空から湧き上がりモヒカン男を縛り上げる光の網。

さらに光の網は、モヒカン男の体を見えない巨人の腕のように彼方へと投げ飛ばす。

術者の力量にもよるが、”一退場レッド・カード”による強制移動はおよそ50km以上。

すくなくとも事が終わるまで、彼が戻ってくることはないであろう。

「やるじゃないか！」

モフが親指を立てて合図を送ると、エレンもまた笑顔で親指を立ててこたえ、アエラは当然だといわんばかりに鼻を鳴らして、次の獲物へ注意を向ける。

思っていた以上に戦いなれている二人に攻撃をまかせ、モフは男

達の攻撃から後衛を守る盾となるべく、背中からバットを引き抜いた。

野球属性の力の満ちるこの国において、バットは剣や槍など及びもつかない、いわば最強の武器だ。

モフの熱血力を帯びてアメジストのように輝くバットを目にし、男達の顔に緊張が走る。

「ほらっ、どうした？ そんなものか？」

縦横無尽にバットを操るモフの前に、魔族の男達は一方的な戦いを強いられていた。

「っ、強すぎる！？」

手にしたバットを弾き飛ばし、がら空きになった胴に上から振り下ろすような回し蹴りを叩き込む。

「ぐほあっ……」

たまらず男が悶絶して崩れ落ちると、モフは体を逆回転するかのよう に勢いをつけて、フルスイングで男を打ち上げた。

「弱いな。この程度なら俺一人でも十分に片付けられるぞ」

クルクルとバットを手で回しながらモフが男地を挑発する。

「な、なめやがって！！」

メリッ、メリメリッ……ビリッ。

激昂した男達の、その体が濃い体毛に覆われはじめ、膨れ上がった筋肉で、身に纏った服が軋みをあげる。

人型でも並外れた腕力を誇る魔族達だが、獣人化したばあいのそれは、人間形態のソレをはるかに上回る。

「困め！ 一気にやれば防ぎきれないはずだ！！」

さらに男達はモフを取り囲むような位置に移動し、そしていっせいにバットを構えた。

「まあ、戦術としては間違っただけが」

その様子を口の端で笑うモフ。

仲間の動きを横目でチラリと確認すると、防御に専念するためバットを中段に構えた。

「死ねええええつ!!」

男達がバットを振り上げた瞬間……
レッドカード

「退場!!」

再びアエラの声が高らかに響き、男達の一人が彼方へと消し飛ばされる。

「戦略的には大間違いだな。お前ら、少しは頭つかえ」

侮蔑するかのような台詞を口にしながら、モフは男達の包囲を潜り抜け、ふたたび防御に専念した構えをとった。
レッドカード

このまま追撃してもよかったのだが、退場の呪文は味方に乱闘を行う者がいると効果を発揮できないのだ。

「この、クソアマがああああつ!!」

さらに二人ばかりが退場を喰らった時点で、先にアエラを片付ける必要がある感じた男達は、モフを無視して後方へとその釘バットの矛先を向けようとするが……

「おっと、余所見はいかんよ、余所見は」

すれ違いざまに伸ばされたモフの足が引つかかって派手に転倒する。

「うわっ、うわわわっ!?!」

「おいおい、モフ。こんなボール球よこすなよつと!」

すかさずエレンとアエラの前に出たオリバーが、ゴルフスイングよろしくバットを振り回し、転倒した男を軽々と屋根の上まで打ち

返す。

とんでもない力だ。

「ぶべらっ!？」

奇妙な断末魔の声を上げた男は、詰め所の屋根でひっくり返ったまま二度ほど痙攣すると、そのまま動かなくなった。

「おいおい、殺すなよ？ オリバー。 あいかわらずとんでもない馬鹿力だな」

まるでボールのように人を弾き飛ばすその臂力に、モフはあきれたような声をあげた。

「お前が突っ込んでくから、こっちは後衛の護衛にされて出番無えんだ。 一匹潰したぐらいでギヤアギヤア言うな！」

ゴンツと、重い金属バットを地面に付きたて、オリバーが不満の声をあげる。

地面を見ると、硬いコンクリートの地面にヒビが入っていた。

「へいへい。 とりあえずあと3匹か」

肩をすくめてモフが敵を振り返ると、男達は肩を寄せ合うように震えながら後退る。

「いいえ、あと2匹よ」

その声とともに、雌豹のような動きで疾駆するエレン。

驚きうろたえる男達を至近距離に捕らえると、そのまま体制を低くとり、滑り込むようにして脚を払った。

そして転倒した男達の一人に、大上段からバットを振り下ろす。

ゴスツ

男が意識を失ったことを確認すると、反撃の余地も許さず風のようにその場から離脱する。

まるで隼の狩りを見ているかのような鮮やかな手際だ。

「……やるねえ」

モフが口笛を吹いて感嘆の声を上げるなか、残った男二人は、勝てる相手ではないと判断したのか背を向けて一目散に逃げ出した。

だが、

「甘いすわっ!」

アエラの声とともに、真紅のオーラを纏って飛んできた物体が頭を直撃する。

一流の投手であるアエラの真骨頂は、言うまでもなくその細い肩から打ち出される剛速球だ。

その一撃をまともに喰らって無事で済むはずもなく、

「……ごふっ」

肺腑のえぐれるような声をあげて、男はあえなく昏倒する。

残るはただ一人。

その生き残った男は、仲間を見捨てて逃げようとするが……

「ひいっ!?!」

いつの間にか移動していたクリスが、男の前に仁王立ちになってその退路を塞いでいた。

「大人しくしろ。死にたくなければな」

汚物を見るような視線を男に注ぐと、クリスはいっそ死ねと言わんばかりの憎々しげな口調で男に降伏を迫る。

「ひっ、ひいっ! た、助けてくれ!! 俺達はただ雇われただけなんだっ!!」

怯え、涙と鼻水で顔をグチャグチャにしながら、男は必死に命乞いをし、地面に跪いて、クリスの脚に縋りつこうとしたが……

「触るな!」

ナイフで腹をえぐるような鋭い声とともに、クリスはスパイクシユーズで男の手を踏みにじった。

「これ以上私の機嫌を損ねてくれるな。 思わず、殺してしまうではないか」

怒りに震える声で、クリスが男の耳にそつと囁く。

ゴリッ

クリスが足首を捻って体重をかけると、男の手から何かが砕けるような音がした。

「耳障りな」

男の顎を蹴り上げて無理やり黙らせると、クリスは感情がエスカレートする前に、背後に控えたモフへと場所を譲った。

「モフ、口を割らせる。 どんな手段を用いてもだ」

「おー 怖いね、ウチの王様は。 さてと、情報収集といきますか…… 男相手にこの力を使うのは嫌なんだがな」

そう告げるなり、モフの体が膨れ上がり、その顔が白毛に覆われた虎になる。

半獣化には、肉体強化のほかにももう一つ意味がある。

それは、魔族がその身に帯びる獣の力を魔力と胴レベルまで昇華させた能力…… スキルと呼ばれる力を行使できることだ。

モフはその力を使うため、その肉球に覆われた大きな手をワキワキと握り締めた。

「た、たのむ…… 殺さないで！」

湧き上がる不安に、男はズボンの前をずぶ濡れにしながら必死でその慈悲を請う。

「とりあえずお前は夢の世界へゆけ。 話はそれからだ」

モフは、その柔らかな肉球のついた掌で男の顔を掴みあげると、ゆっくりと優しく揉みしだきはじめる。

「あ……あへ……あへえっ……」

とたんに男の顔がだらしく弛緩し、目は虚ろに、口からは舌と恍惚に満ちた喘ぎ声がこぼれだした。

「”魅惑の肉球”か。あいかわらず、うらやまし……じゃなくて、恐ろしい力だぜ」

その様子を眺めていたオリバーが、ウェツと吐く真似をしながら呟く。

いくら至上の快楽を与えられると言っても、精神が崩壊した上にモフの命令に忠実な人形にされるのはごめんこうむりたい。

やがて全ての情報を引き出すと、モフは後ろを振り返ってクリスに目線で合図を送る。

「急ぐぞ。ユウが待ってる」

その視線に頷くと、クリスはモフに先導を任せて工場の敷地に足を踏み入れた。

悪の栄えに、神の鉄槌を

その頃、ユウは工場の敷地内を一人彷徨っていた。

「なんでこんなモノがあるんだよ……」

不安と怒りの混じった声が、複雑に入り組んだ壁に吸い込まれる。ユウの目の前にあるのはコンクリートの壁などではなく、廃棄された車両で出来たバリケード。

隙間にはコンクリートの破片や灯油の缶のようなものが無秩序に押し込められており、その表面にはご丁寧なことに鉄条網まで張り巡らされていた。

そつと手を伸ばし、鉄条網の針に触れる。

長さ2センチ、太さはおよそ1ミリ。

適当に作られたらしく、質の悪いその金属片は、先が丸く潰れてはいるものの指で触れると鈍い痛みが走る。

「やっぱり……やめたほうがいいよね」

無理によじ登れば乗り越えられるものかもしれないが、乱雑に作られたソレは見るからに不安定で、何かの拍子に雪崩のごとく崩れてきそうな雰囲気を漂わせていた。

別に無理にここを通る必要は無い。

他の道を探す余裕は……

「フザケやがって、あのアマ！ ブツ殺してやる……！」

……あまり無いかもしれない。

後ろから響く、妙にカタカナの多い叫びを聞きながらユウは苛立ちの混じるため息を吐いた。

急いでいま入ってきた路地を戻り、隣の路地を走りぬける。

出口を探してあたりを見回せば、縦横に伸びる通路のいくつか、同じようなバリケードで塞がれていた。

「なんか、おかしくない？ この工場」

何の工場だったかは定かでは無いが、物を作る場所である以上は運搬のために移動のしやすい設計がされるはずだ。

その機能性をバリケードによって潰されたということは、この場所を おそらく不法占拠した者達は、この場所の”広さ”は欲しかったが”機能性”を必要としなかった事になる。

何のために？

……わからない。

あえてこの場所に意味を見出すなら、使われなくなった工場を迷路にでも改造したとも言うのだろうか？

否。これはアトラクションでも迷路でもない。

ああ、そうだ。

迷路でもないのに、人の動きを妨げることにメリットが発生する構造物が他にもある。

それは……

嫌な事を想像しそうになり、ユウはブルッと体を一度震わせ、その予感から身を守るかのように体を抱きしめた。

「うおら、どこ言った小娘えっ！！」

遠くからユウを探すハイエナ男の声が聞こえてくる。

早くここから逃げなくては……

あて推量で通路を選ぶと、ユウはその細い通路に滑り込んだ。

「あつ、あれ外壁なんじゃ？」

通路の先に見えるのは、外壁らしき高い壁。

その向こうに建物の影は無い。

その4mはありそうな壁の上には、さらに藪のように鉄条網が張

り巡らされていたが、ここから確実に逃げられると言うのなら多少の傷やリスクは受け入れるべきだ。

問題があるとすれば、そこに電気が流れていた場合だが……鉄条網と同化するかのように絡みついて生い茂るヒルガオの蔓が、そこに高圧電流が流れていないとユウに教えてくれていた。

……いける！

ユウは迷わず壁に駆け寄ると、モルタルの壁に刻まれた僅かな溝に指をかけて、灰色に汚れた壁面をよじ登り始める。

1mほど上ったところだったろうか？

ぎゃああああああ

壁を登ることに集中していたユウの耳に、不意にカラスを絞め殺すかのような絶叫が響いた。

続けて響く殴打の音と誰かの怒号。

「何が……起きているんだろ？　って、うわっ!？」

呟くその頭の上を、ものすごい速さで一人の男が飛んで行く。

それはアエラの退場の呪文で強制退去させられた男の姿だったが、事情を知らぬユウにとっては、まさに天変地異のような光景だ。

「は、早くここから逃げよう!」

未知の恐怖に突き動かされるように、手足を動かすスピードを上げる。

この時ユウは、まさかクリスや姉が自分を探しにこの廃工場に入入しているとは夢にも思っていなかった。

「見つけたぞ、小娘！　そこ動くな!!」

半分ぐらい壁を登った頃だろうか？

ついに追いついてきたハイエナ男の声。

……早すぎる!？

だがよくよく考えれば、この廃工場が迷路のような造りになって

いる以上、出口となりそうな場所は限られている。

その少ない出口候補を虱潰しに探すだけで、ハイエナ男はあっさりとユウを見つけることが出来るのだ。

「わああっ！ よるな！ 触るな！ 近寄るな！！」

勢いよく壁に張り付いてきたハイエナ男に拒絶の声を浴びせながら、ユウは必死で手足を動かす。

何か投げつけてやりたいところだが、あいにくとここには手ごろな獲物はおるか、足場すら不自由な場所だ。

ユウは無駄を悟ると男を無視し、壁の上にかかるために汗で滑る指に全てを集中した。

その指先で引っかかりそうな場所を探し、足を踏み外さないように細心の注意を払う。

同時にできるだけ素早く。

しかし焦れば魔ツさかさまに落下する。

尻のあたりがムズムズするような焦燥感を感じながらも、ユウは一步步着実に上に上がっていった。

そしてついに壁の上に繁茂する鉄条網に手をかける。

「痛ッ！」

勢いよく伸ばした手に、えぐるような痛みが走る。

ユウは痛みのあまり、この針の山へと再び手を伸ばすことを躊躇った。

だが、ここで躊躇すれば明日は無い。

「うへへへ……怪我でもしたのか？ どうせ痛い思いをするなら、俺を楽しませながらにしてくれよ」

その躊躇を嘲笑うかのように、粘つくような声で嫌悪しか沸かない台詞を口にしながら、ハイエナ男が壁をよじ登ってくる。

その不快感にムツとして、思わず下を向き、ユウはめまいを起しそうになった。

……高い。

上から見下ろす4 mの高さというものは、下から眺めて想像する光景よりも恐ろしい。

脚を滑らただけでも、真っ逆さまに落ちて大怪我をする事は必死だ。

風が軽く肩を撫でるだけで、壁から振り落とされそうになる予感がして、手足が強く強張ってしまう。

キモが冷えるというのはまさにこのことだろうか？

そこを陰気な目をしたハイエナ男が上ってくる様は、まるで自分が地獄を逃げ出そうとする亡者になったのではないかと思わせた。

イ・ヤ・だ！

こんなヤツにはつかまりたくない。

その一心で、ユウは痛みを無視して棘だらけの鉄条網の上に這い上がる。

棘が服に引っかかり、いくつものかぎ裂きを作り出した。

せっかくのユニフォームが台無しになるのはガマンならなかったが、そこに構っている余裕は無い。

そのすぐ後ろをハイエナ男が迫っていた。

このままではつかまる…… ヴェイスボウルをする時なら熱血力が働くために気にならないが、人と魔族では基本的に身体能力が大きく違うのだ。

もはや、手段など選んではいられない。

ユウは覚悟を決めると、鉄条網の上でその動きを止めた。

「ほうら、捕まえたぜ！」

手を伸ばせばユウの足首に手が届く距離で、ハイエナ男が憎悪と歪んだ笑顔で悪鬼のような顔を作りながら暗い歓喜の声を上げる。

だが、ユウはその一瞬を待っていた。

「亡者は……地獄に帰れ！！」

ユウは足ギリギリでその手を交わすと、スパイクシューズをはいた足を振り上げ、思いっきりその手を踏みにじった。

「ぐあああああつ!!」

ギリッ……ガリギリッ、ゴリッ

手の甲と、指の骨の感触がかすかに足の裏から伝わる。
気持ちが悪い。

その原因はハイエナ男への嫌悪か、それとも罪悪感か。

腸から突き上げる不快感をねじ伏せるように、ユウはその足に力を込めた。

「ひっ、ひぎやああああつ!? や、やめろ! やめてく……れ……」

悲痛な声を上げて、ハイエナ男の片手が壁離れる。

その問いミングで、ユウは足を振り上げ、その顔面に再び蹴りを叩き込む。

ああ、そんな無慈悲な自分のやり方がたまらなく忌まわしい。

だが、それよりもなおこの男に捕まるのが嫌だった。

「ああああああああああ……」

ユウに蹴落とされて、ハイエナ男の手が、足が、高い壁から離れてゆく。

悲痛というより、理解できないと言う顔をして、ハイエナ男の姿がみるみる小さくなっていった。

牛や豚を屠殺する人というのはこんな気分なのだろうか?

自分の胸のうちに湧き上がる冷たい感情に、ユウは自分が人でなくなつたような妙な喪失感を覚えていた。

見下ろせば、まるで映画のワンシーンのように、瓦礫の散らばる地面にハイエナ男がすいこまれてゆく。

ユウは次の展開を思い、その目を堅く閉じた。

ドスッ

きつく目を閉じた闇の中で、ユウは何か荷物を投げ出したようなその音を聞いた。

……なんだろう。

もつと悲痛な音がすればよかったのに。

これではまるでただの”モノ”のようではないか。

その乾いた現実こそが何よりも忌まわしかった。

「悪いのはボクじゃない。これは貴方が招いた結果だから」

相手のためではなく、自分のためにその台詞を投げ捨てると、ユウはその体を壁の向こう側へと踊らせ、慎重にその壁を下り始めた。

そして残り2mほどと言うあたりになったときのことだった。

不意に聞こえてきた物音に振り返ると、遮蔽物の無い農道の向こうから黒塗りの車がこちらめがけて走ってくるではないか。

敵の増援！？

ここまできて、また捕まるわけには行かない。

ユウは大きく息を吸うと、素早くこの場を立ち去るために、意を決して壁から飛び降りた。

ざしゅっ。

着地の衝撃とともに、足の裏と膝に軋むような痛みが走る。

……まずい、ちょっと捻ったかも。

着地をしくじった事を感じながらも、ユウはそのまま二三歩ほど前によるめくと、体を前に投げ出すかのように全力で畦の向こうに走り出した。

向こうの車も、ユウの存在に気がついたのか、スピードを上げてこちらに真っ直ぐ向かってくる。

車窓が開き、低い声で誰かが何か怒鳴ったようだが、ユウの耳には何を言っているのかまるで理解ができなかった。

ぞくっ

あ、何かくる!?

不意に、全身の毛が逆立つような寒気を覚えて後ろに飛び退る。次の瞬間、その目の前を毒のような色をした紫の閃光が掠めた。

ズドンっ!!

ユウの足元で何かが爆発を引き起こし、派手に砂埃を巻き上げる。

「待てというのに聞かぬお前が悪いのだ」

横手から聞こえてきたその声に振り向くと、そこには先ほどの閃光と同じ色のオーラを纏った人物がこちらをニコリともせずに見つめていた。

いや、むしろそれは無表情と呼んだほうが的確だろう。

その表情から感じるのは、憎悪でできなく虫けらでも見るような無関心。

睨んでいたように見えたのは、単に彼の顔が厳ついからだろうか。

「待てといわれて待つのは、よほどの馬鹿正直か、愚か者かだと思いませんか?」

腰を抜かしそうなほどの恐怖を覚えながら、ユウは精一杯の虚勢をかき集めて男にそう言い返した。

正直、膝がガクガクと笑い出し、そのまま気絶しそうなほど青ざめた顔で言ったところで意味は無いのだが、そのまま現実逃避をするにはユウのプライドが高すぎたのだ。

「なるほど、見た目だけかと思いきや、意外と骨があるようだ」

男は口元だけでニヤリと笑うと、ユウを上から下まで値踏みするかのように眺め回す。

なんとなく癪に障ったので、ユウもまた男を観察することにした。
年のころは40手前ぐらいだろうか？

フサフサと逆立つ鬘のような黒髪と、もみあげからそのまま繋がるように顎を覆い隠す黒い髭。

黒で統一された衣装は一見地味で機能のみを重視した造りだが、使われている素材はおそらくユウが名前すら聞いたことも無い高級品だろう。

いや、この男が着るならば、きっとその辺のバーゲンで買ってきた安物でさえも高級品見えるに違いない。

おそらく貴族であろう、その黒い獅子の因子を持つ魔族は、
「なるほど、あのクリスが興味を示すのだからどんな女かと思ったが、少々意外な趣味だったな」

興味をなくしたように呟くと、ユウの身柄を押さえるよう、背後の手下に顎で指示を出した。

その命を受けて、黒づくめの男達がユウの体に手を伸ばす。

「さ、触るなっ！」

男達がユウの腕を掴んだその瞬間、突然背後で耳を劈くつんぱような爆音とともにユウの体は周囲の男達ごと畑のあぜ道へと突き飛ばされた。

何事！？

体にぶつかる砂利の痛みをこらえて振り返ると、きな臭い土ぼこりの煙とともに工場の壁を突き破り、何か魚雷かミサイルのようなものが地面を這うように突進してくる。

「う、うわっ!？」

漆黒のそれは突然のことに身動きすらできないユウの横をすり抜け、凶暴な鯨のように男達へと襲い掛かって跳ね飛ばすと、たなびく土煙を悠然と払いながら体を起こした。

「貴様！ 何をしているっ！ ユウに触れるな!!」

漆黒のミサイルの正体……クリスは憎々しげに黒獅子を睨みつけ、
ユウの前に立ちはだかった。

「ほう、噂をすれば影というやつか」

黒獅子が、クツクツとのどの奥を鳴らして愉快そうに哂う。

「ユウ！ 怪我は無い？」

続いて碎けた壁の残骸を乗り越え、エレンが飛び出してきた。

「姉さん！？」

呆然としたユウを背中から抱きしめると、エレンはユウの体を抱えて黒獅子たちから離れた位置へと移動させる。

「痛いよ姉さん！……なぜここへ？」

抱きしめる腕の強さにユウが悲鳴を上げると、エレンは眉を吊り上げて

「当たり前でしょ？ あたしがアンタを助けなくて、誰が助けにゆくよ？ ああ、クリスさん？ まさかアンタに春がくるとはね」

途中で腹が立ってきたのか、エレンは仏頂面を作ると、ユウの頭を軽く小突いた。

「ほんと。何故とはずいぶんな台詞ですわね。妹が浚われて探

さない家族がいるわけありませんわ」

突然横から聞こえてきた、その高飛車な口調に、ユウは我が耳を疑った。

「アエラさんまで？」

ユウにとっては、天敵とまではゆかないものの、普段からかなり微妙な関係の彼女である。

姉と長年バッテリーを組んでいるだけあって、高慢な態度と言動と裏腹に実は繊細で面倒見のいい女性であることは知っているが、わざわざ自分のためにこんなところまでくるほどの義理は無い。

あえて可能性があるとしたら、相方である姉のエレンを一人で行かせることができなかったという理由ぐらいだろうか？

……いや、なにかこれは突拍子もない夢かもしれない。

そのほうがはるかに説得力がある。

思わず頬を抓ろうとしたユウ仕草を見咎め、アエラは不満げに鼻を鳴らした。

「ま、万年補欠のヘツポコでも、一応はチームメイトです。助けにきて何がおかしいんですの？」

さすがにユウが不可解に思う自覚はあるのだろう。

その視線はあさつてのほうを向いていた。

「ほんとばかりバーさんにいいところ見せたかっただけのくせに」
後ろからエレンがボソッと呟くと、

「そこっ！ うるさいっ！！」

顔を真っ赤にしてツバを飛ばしながら、淑女台無し大声をあげてエレンの口を閉じさせようとする。

「なんで……俺なんだ？」

先ほどのエレンの台詞を聞きつけたのか、いつのまにか近くにきていたオリバーが軽く首を捻る。

腑に落ちない顔ではあるものの、自分の役目を優先させたオリバーは、その大きな背中ユウやエレンを覆い隠すように黒獅子たちへと立ちはだかった。

「な、なんでもありませんわっ！ 育ちの悪い野良犬の戯言をいちいち聞く必要ありませんわよっ」

慌てて声のトーンをいつものレベルに落とすものの、その顔はさらに赤い。

視線を合わせるのも恥ずかしいのか、俯いたままの台詞である。

「ね？」

「なるほど」

その横で、仲良く頷きあつた姉妹（？）をエレンは親の敵のようににらみつけた。

「そういう楽しみは後にしてくれ。隙を見て撤収するぞ」

軽く溜息をつきながら、後ろからのつそりと顔を出したモフが、工場内を警戒しながらユウとエレンに注意を飛ばす。

一方、クリスは怒りもあらわに、謎の黒獅子とにらみ合いを続けていた。

「偶然手に入れた獲物が、大きな魚のえさになると知って慌てて拠点に戻ってくれば、すでに魚がかかった後とはな。まさかお前がこんなに早くここにくるとは、計算外だったぞ、クリス」

舌なめずりでもしそうな声で笑う黒獅子をクリスは鼻で笑い、嘲笑には嘲笑で返すとばかりに冷たい声でこう告げた。

「魚とはワタシのことか？ 叔父上」

その台詞に、黒獅子の顔がピクリと動く。

クリスの言葉に反応したのは黒獅子だけではなかった。

「叔父上？ まさか貴様……ライゼル公爵か！？」

モフの目が驚愕に見開かれ、オリバーの全身の毛が逆立つ。

そしてその口から飛び出した名前に、ユウのみならずエレンやアエラまでが震え上がった。

ライゼル侯爵……それはクリスの父である前王と王位を争い、当時の王を含む多数の王族を爆弾テロで暗殺し、生涯幽閉される事になった反逆者の名前であった。

現在は幽閉された居城を脱走し、反王室組織の元締めとなったと言われている男だ。

クリスの父もまた、彼の組織のしかけた爆弾テロで命を失っていた。

「さすがはクリスとモフ將軍。髪と目の色を変えただけではごまかせないか」

自分を知っている者がいることで虚栄心が満たされたのか、なぜか満足気な表情をするライゼル公爵。

その仕草が癪に障るのか、クリスはギリギリと奥歯をかみ締めた。

「いくら姿形を変えたところで、その倣岸な態度と不遜な言動はお前以外にありえるものか！」

その横顔にたたき付けるようにクリスが罵声を浴びせると、ライゼルは興がそがれたといわんばかりの顔になり、

「王の威厳と気高さを理解できぬとは、嘆かわしい。まあ良い。

ここでお前と親交を深めるつもりはさらさら無い。むしろ私も父とあの世で存分に語らうがよからう」

残酷なまでの余裕を見せながら、部下の後ろに退いた。

「再開したばかりでこういうのも何だが、お前の顔も見飽きた。父の元へ行け、クリス」

その言葉と同時に、男達の手から色とりどりの光を纏ったボールが一斉にクリスに向かって投げつけられる。

とつさにモフとオリバーが動き、クリスをかばうように立ちふさが
るが……

「クリスさん!？」

ユウの悲痛な叫びをかき消すように、三人の体は爆炎と閃光の中に消えた。

「ふん、他愛もない」

土煙を鬱陶しげに手で払いながら呟くと、ライゼルは配下の手から葉巻を受け取り、その口元に咥えた。

そして別の部下がそれに火をつける。

「ああ、一人残されるのも寂しかろう。小娘、お前もいますぐにクリスのところへ送ってやるぞ」

膝を突いて頂垂れるユウの姿を目にし、ライゼルが紫煙を吐き出し残忍な笑みを浮かべる。

その表情は虫の手足をもぎ取って遊ぶ子供のようでもあり、ネズミをいたぶる猫のような喜びであった。

「ユウっ！ 何してるの！ はやく逃げるのよ！..!」
「.....」

必死で腕を引くエレンにも、ユウはまるで反応を返さない。

ライゼルは、楽しそうにバットを引き抜くと、その頭上に振り上げる。

「小娘。何か遺言はあるか？」

そのライゼルの言葉に、別の方向から答える声があった。

「勝って兜の緒を締めよ.....ってのはどうだ？」

キーン！

横合いから打ち込まれたバットの一撃を、ライゼルはこともなげに受け止める。

「おお、それは耳が痛いな。それにしても、しぶとい奴だ。その分楽しみ甲斐があるというものだが」

反撃とばかりにライゼルがバットを振りかざすと、立ち込めていた煙が風に切り裂かれて霧散する。

煙が晴れると、そこにはバットを構えたモフと、その背後に立つ無傷のクリス。

そして、そのクリスを守るかのように屹立するケルベロスの巨体。なるほど、そのケルベロスの巨体で球を受けきったか。たいし

た忠義だ。　褒めてやろう……ゆっくり眠るが良い」

感嘆の声を上げるライゼルの目の前で、オリバーの巨体がゆっくりと前のめりに崩れ落ちる。

「オリバーさん!？」

悲痛な声を上げるアエラ。

その声を合図にしたかのように、ライゼルは猛禽のような素早さでモフの横をすり抜け、オリバーを蹴飛ばすと、上段に構えたバットをクリスに振り下ろす。

「荒い攻め方だ。　貴様の攻撃には気品が無い。　この程度の攻撃しかできぬから、お前は未だ王位を手に入れることができぬのだ」
その一撃をバットで受け止めたクリスは、しびれる手の痛みをこらえながら、挑発の言葉を口にする。

「黙れ、この野良猫が!!」

激昂したライゼルは、そのままバットでクリスの体を押さえつけると、思いい前蹴りを繰り出してクリスの体を跳ね飛ばす。

「……くはっ!」

とっさに後ろに飛んで衝撃を弱めたものの、口からは思わず苦痛の声があがる。

「お前ら、この野良猫をもう一度蜂の巣にしてやれ!!」

膝をついたクリスを指差し、ライゼルが声を荒げる。

だが、背後に控えた部下達は沈黙を保っていた。

「……なに？」

よく見ると、部下達の目がぼんやりと焦点を失っている。
ハッとしたライゼルが横を向くと、そこには半獣の姿で左手を広

げるモフの姿があった。

その手からは、なんとも悩ましげな波動が、津波のように押し寄せている。

「無駄だ。お前の部下は全て俺の秘術に魅せられて正気を失っている」

「魅惑の肉球か。小ざかしい力を使いおつて！」

ライゼルは、モフの放つ魔性の快楽を狂気にも似た精神力で振り払うと、そのバットをモフに向かって振り上げた。

「くそっ、なんて厄介なオッサンだ！」

モフは毒付きながら右手に構えたバットでその攻撃を受け流す。

「黙れ、小僧！ お前もあと5年もしないうちにそう呼ばれるようになるわっ！」

オッサン呼ばわりされたのがよほどお気に召さなかったらしく、ライゼルはモフの耳にかなり聞きたくないであろう台詞を流し込んだ。

「……だ、断固として断る！」

精神的に少なくないダメージを負いながら、モフは後ろに下がりながらその強烈な攻撃を捌ききる。

「無駄だ！ 時の流れには逆らえぬとしれ！！」

だが、ライゼルはそのまま流れるような動きで、モフへと次々に斬撃を繰り出した。

万全な体制ならば互角に渡り合えるモフも、左手の肉球で他の敵の意識を押さえ込んでいる今の状態では防戦に徹するしかない。

「私の存在を無視するとはいい度胸だな！ ライゼルっ！！」

その横合いからクリスが鋭い斬撃を与えるものの、

「温いわ、小僧！！」

恐るべき敏捷さで横に転がると、ライゼルは呆然と立ち尽くす部下の腰からバットを奪い去り、両手に一本ずつ構えた。

「こい！ 小童共！！」

「「うおおおおお！！」」

悠然と構えるライゼルに、クリスとモフが同時に殴りかかる。

だが、ライゼルは両手のバットを構えると、裂帛の気合とともに「奥義、八重垣の陣！！」

そう叫ぶなり、凄まじいスピードで両手のバットを繰り出した。それは防御とカウンターを重視した堅牢にして精妙なる剣術の構え。

大魔剣士ライゼル……そう、彼はこの国において数少ない、バットではなく剣を操る技に長けた戦士であった。

やがて攻め続けたクリスとモフも息を切らし始める頃、工場の中から複数の足音が聞こえてきた。

敵の増援に、クリスとモフの顔が青ざめる。

「まさか……二人がかりで傷一つ与えられないとは」

クリスの顔が悔しげに歪む。

「く、くそつ……最強戦士の名は伊達じゃないって事が」

モフの顔にも絶望の影が広がり始めていた。

やがてやってきた男達は、モフとクリスを囲むようにしてボールを構えた。

勝ち誇ったライゼルは、尊大に胸をそらすと、

「諦める。その力は評価に値するが、所詮お前らに勝ち目は無い。理解していただけたかな？ では、理解したところで死……」

部下に命令を出そうとしたとき、甲高い声が割り込んできた。

「まって！」

声の主を探ると、そこには肩を震わせながらライゼルを凝視するユウの姿があった。

「なんだ貴様か。下らん」

失望の目でユウを見ると、再び部下に命令を下そうとする。

「……ライゼル公爵、ボクと賭けをしませんか？」

無視を決め込んでライゼルに向かって、ユウは震える声でそう告げた。

取るに足らない存在から投げつけられた挑戦状に、ライゼルの顔が怒りで歪む。

「小僧。誰に向かってモノを言っている。貴様ごときの無視が最強たる私に勝負だ！？ 寝言なら死んでから言え！！」

まさに獅子の咆哮。

その気迫に消し飛ばされそうになりながらも、ユウは全身の力を振り絞ってライゼルを睨み返した。

「こう見えてもボクはピッチャーです。ボクが球を投げて、それを貴方が打ち返せたら大人しくしを受け入れましょう。それともムシケラのようなボクのことか怖いのですか？」

震える声で、精一杯の挑発を投げかける。

ユウは不敵に晒ったつもりだが、おそらく顔が引きつっただけであらう。

推測に過ぎないが、ライゼルと言う男はおそろしくプライドが高くて気が短い。

ならば、そこにつけこめば何らかの勝利が舞い込むかもしれない。ユウはそこに全てを賭けた。

勝負に持ち込めば、活路はある。

全ては、ライゼルと言う男の性格にかかっていた。

「面白い。そこまで言うなら相手をしてやろう。だが、お前が負けたなら、想像すらできぬ残酷な死を与えてやるから、そう思え！！」

そしてユウは、自らが賭けに勝利したことを確信した。

「ユウ、やる気なのね……」

エレンが青ざめた顔で呟く。

「ユウ！ あなた、半人前のクセに何を言ってますの！？ 勝ち目なんてあるわけないでしょ！！」

エレンもまた、その口調とは裏腹に心底ユウの心配をしていた。

「すみません。 でも、この勝負はボクがやらせていただきます。 勝ち目ならちゃんとありますから」

その引きつった笑顔に、アエラはハツとする。

「ま、まさかあなた、アレを使う気ですの！？」

そんな二人にぎこちなく微笑むと、ユウは振り返って膝について肩で息をしているクリスに、精一杯の微笑みを向けた。

「ユウ。 すまない。 ワタシが不甲斐ないばかりに」

その視線に耐えられないといわんばかりに下を向くクリス。

「うっん。 気にしないで。 ボクはむしろ嬉しいんだ」

そのクリスに、ユウは思っても居なかった言葉を投げかけた。

「嬉しい？」

「だって、好きな人を自分で守れるって…… ちょっとあこがれない？」

そう言って、ユウは恥ずかしそうに笑う。

「臭い台詞だな」

そしてクリスもまた、同じように笑った。

「いいでしょ？ こんなときでもなきや一生こんな台詞使うこと無いんだから」

その反応に、ユウはちょっと唇を尖らせてみせる。

「そうだな。 それと…… ちょっとかつこいいぞ」

その言葉は、半ば独り言のように、誰も聞こえないほどの小さな

声で呟かれた。

「何をゴチャゴチャ言っている小僧！ 四の五の言わずにさっさとかかって来い！」

そんな甘い二人の雰囲気を邪魔するように、ライゼルが雷のような声を張り上げる。

「言われなくてもそうします。 言っておきますけど、負けるつもりは全然ありませんから」

立ち上がったユウはライゼルを睨みつけて、マウンドがわりの白線の枠の中に移動する。

「ほざけ、この雑魚がー!!」

悪態をつきながらも、ライゼルは思わぬ心地良い緊張感に喜悦を滲ませていた。

ユウは、ライゼルという男の評価に、”戦闘狂”という項目をひそかに追加した。

アエラに向かって一つ頷くと、エレンがキャッチャーミットを手にはめてチョークで描いた五角形の向こう側に座る。

「行くぞ、ライゼル！」

「こいつ！ 小僧!!」

二人の視線がぶつかり合い、ユウが大きくその腕を振りかぶる。

「……せいっ！」

ユウの投げた球は、真夏の太陽のような純白の光を纏い、重い音を立ててキャチャーミットに吸い込まれた。

「ストライーク！」

審判役を勤めるモフが、投球の判定を間延びした大声で告げる。

「ふん。 なかなか良い球を投げるではないか」

舌なめずりをしながら、ライゼルが刃物のような笑みを浮かべる。

その台詞には応えず、ユウは二球目を振りかぶる。

「だが、このライゼルを討ち取るには力が足りぬわ!」

裂帛の気合とともに、ライゼルはそのバットを振りぬいた。

キン!

「ファ、ファール!!」

打球は僅かに左へと逸れ、田園風景の彼方へと消えてゆく。

「ふむ。 少しそれたか。 だが次で終わりだ。 お前の球は見切った!!」

自信たつぷりにライゼルがそう宣言すると、

「……それはどうでしょう?」

ユウは挑発するでもなく、ごく当たり前のようにそう答えた。

「なに?」

ライゼルのマユがピクリと跳ねる。

「本気でいきます。 覚悟してください」

そう宣言すると、ユウは今までより時間をかけて意識を集中し、ゆっくりとした動きで右腕を振りかぶった。

「来る。 ユウのアレが」

誰に聞かせるでもなく、モフの後ろでアエラが呟く。

「なんだそれ?」

思わずモフが疑問を口にする、

「理不尽で不可解で、よほど追い詰められない限り本人にも自分の意志で投げることができないことと、投げたときの効果があまりにも恐ろしいために、ユウを万年補欠に押し込めている原因の……い

わゆる魔球というヤツですわ」

畏れのこもった口調で、アエラはモフの疑問にそう説明を返した。
「な、なんだそりゃ!？」

「くらええええつ！」

今までの球をはるかに上回る光とともに、ユウの手から輝く白球が放たれる。

「もらったああああつ！」

だが、ライゼルは勝利を確信した顔で、その弾丸をバットで弾き返す！

ガキン！

廃工場の外に、鈍い金属音が木霊した。

「み、見事だ、小僧…… このライゼル、生まれてはじめての……
敗……北……」

そう告げるなり、ライゼルの体がゆっくりと倒れる。

「い、痛い…… アレは痛い」

思わずモフが眉をしかめてそう漏らす。

その手は、なぜか自分の股間を押さえていた。

見れば、周囲の男達も、床に転がっていたオリバーも、同じように手で股間を押さえている。

ユウの魔球……それは、打った球がなぜか確実に自打球、しかも高確率で股間を直撃するという恐るべき代物であった。

彼に宿る才能、それは野球ではなく跳弾撃ちと言う、きわめてこの世界にそぐわない物騒な代物だったのである。

「勝ったよ、みんな！」

嬉しそうな駆け寄ってくるユウを、なぜか素直に祝福できなかった彼らを攻めることは、おそらく誰にもできないであろう。

ましてや、男ならば。

「ユウ、こんど特別に練習に付き合ってあげますから、その魔球、完全にコントロールできるようにしませんこと？」

アエラがぼつりとそう呟くと、

「……それもいいね」

ユウは小首を傾げながらしみじみと頷いた。

たのむ、それだけはやめてくれ！

モフとオリバーが心のそこからそう願ったのは言うまでも無い。

球神はかく語りき

工場での一戦いから一週間が過ぎた。

朝も早い時間からスタジアム神殿に集まったユウたちのチームは、そろいのユニフォームに着替えると、体を温めるためにグラウンドの隅で準備体操を始めていた。

今日はいよいよユウのチームと、クリスのチームが対戦をする日である。

乾いた空は抜けるように澄み渡り、金色に輝く太陽がグラウンドでウォーミングアップをする選手達の上に容赦なく熱い光を降り注ぐ。

そんな中、ユウは一人憂鬱な気分で投球練習をしていた。

ユウは結局スタメンには選ばれなかったが、事情を考慮したアエラの口添えもあって、今回はベンチで控え投手として座る事が許されている。

本来ならば非常に喜ばしいことなのだが、ユウ当人の顔はなぜか暗い。

その理由はといえば、実に彼らしい話だった。

ユウがここにいることを許されたということは、ユウのほかには控えの投手がこの場に座る権利を失ったと言うことである。

メンバーの発表があった日から、ユウはその人物から敵のような目で見られている。

その視線に耐えられず、ユウの投げた球が、投球練習用のネットから外れた場所に飛んでゆくと、その選手は嘲るように鼻を鳴らし

て、他の選手となにやらユウには聞こえない声でヒソヒソと会話を始めた。

時々ユウの方を意地の悪い目でチラチラと見ることも忘れない。

ガシャアアッン！

不意に、その噂話に興じる女達の横で、飲みかけの飲み物が派手に爆発した。

「ひっ！？」

何が起こったのかと周りを見回した女達が見たのは、真紅のオーラを身に纏いつたアエラの、その真逆の冷たさを帯びた眼差しだった。

「ごめんあそばせ。なにやらうるさい小鳥が耳障りだったので始末しようと思ったんですけど、あなた達でしたのね？」

ニツコリと笑うものの、その感じる気配はなまじ怒り狂っているより恐ろしい。

「っしっ、失礼しましたーっ！」「」

慌てて逃げ出した女達を呆然と見送りながら、ユウはペコリとアエラに頭を下げた。

「あ、ありがとうございます」

「何を勘違いしてらっしゃるのかわからないけど。ワタシは耳障りなものを追っ払っただけです」

視線も合わせず横を向く顔は、冷たく近寄りがたい雰囲気だったが、よく見ると耳の部分だけ真っ赤に染まっている。

なるほど、これが姉の相方なのか。

ユウは、今になってやっとこの女性の本質を見たような気がした。

「何がおかしいんですの！？」

そのぶしつけな視線が気に障ったのか、アエラはユウをギロリと

睨みつける。

「あ、あの……えっと、あ、ちょっと飲み物を取りに言ってきます！」

適当な理由をつけて廊下に逃げ込むと、

「あの……困ります」

今度はどこからともなくエレンの困ったような声が聞こえてくる。

同時に聞こえてくるのは、聞き覚えのある低い声。

試合前に誰かちよっかいでもかけてきたのだろうか？

気の強い姉のことだから、気に入らなければ相手の顔を拳で殴りつけるだろうが、それでも魔族の男共と比べれば非力な存在である。

「姉さん、どうし……」

助けに入ろうと声を上げようとしたユウの口を、後ろから誰かが手で塞いだ。

「静かに」

ユウの口を塞いだのは、アエラだった。

訳もわからず混乱するユウを無視し、アエラの視線は、なにやらエレンに絡んでいる浅黒い大男の背中に注がれる。

「エレンさん、俺のだらしない噂は色々と聞き及んでいると思う。

だが、それは今まで本当に好きな相手がいなかったからなんだ」

熱烈な思いをぶちまけている浅黒い大男の正体は、なんと魔王の腹心であるオリバーだった。

だが、

「ごめんなさい。私、他に好きな人がいるんです」

さすがに殴り飛ばして物理的に黙らせる訳にも行かず、視線を逸らすことで拒絶の意味を示すエレン。

「なにこのわかりやすい三文芝居」

思わずそう漏らしたユウの口を、

「……黙って」

アエラが首を絞めることで黙らせる。

「貴方が好きな相手というのは、もしかしてモフのやつの事ですか？」

見上げるような巨体をエレンの頭より低くかがめ、エレンの肩を大きな手でそつと掴み、上目遣いに懇願するような口調でそう尋ねる。

その問いかけにエレンが台詞で応えることはなかったが、沈黙した横顔の頬をばら色に染めることで雄弁に物語っていた。

「モフには、他に好きな人がいますよ」

ずるいとわかっていても、そう言わずにはいられない。

モフに拒絶されて彼女が傷つくぐらいなら、どんな卑怯な手を使っても彼女の思いを諦めさせる。

そして自分がその心の隙間を埋めてあげたい。

いや、それが間違っていて、自分勝手なただの妄想なのはわかっている。

だが、その都合の良い妄想に狂い、酔わずにはいられない。

自分勝手に独りよがりで、それでいてあまりにも甘美な感情……それが恋というものだから。

そしてそれはエレンもまた同じ事であることに、オリバーは気づかない。

「わかってます。でも、好きなんです。彼が」

短い沈黙の後に、エレンの口から零れ落ちたその短い返答が、何万発の拳よりも深くオリバーを打ちのめした。

肩を落とし、自分の好きな相手の想いを一身に受ける親友に殺意にも似た恨みを覚える。

だが、涙はこぼれない。

なぜなら、

「今の貴方が、モフの奴を好きならそれでいい。でも、俺は……この試合に勝利して貴方を臨みます。そして待ちます」

まだ、諦めていないから。

いや、諦めきれないから。

「貴方が自分の事を見てくれる日まで」

そこまで言い切ると、オリバーはエレンの肩をそつと手放した。

だが、次の瞬間、

「なら、私が同じことをしても構いませんわよね？」

ユウの口から手を離し、アエラは毅然とした佇まいで前に出ると、その目に並々ならぬ意志を漂わせてそう言い放った。

「アエラ……さん」

予想外の人物の登場に、オリバーの目が驚愕で見開かれる。

「お慕い申し上げます。オリバー様」

頬を薔薇色に染め、長い睫に縁取られた瞳を伏せて、アエラが震える声で自らの想いを告げた。

まるで、そこに光が下りたようだ。

オリバーはその時のことを後にそう語ったという。

恋する乙女は美しい……とは、いったい誰が言い出したのか知れたものではないが、その時のアエラの顔は、誰が見ても美しいと賛美しただろう。

だが、同じように使い古されたフレーズに、綺麗な薔薇には棘があるというものがある。

「そして、覚悟してくださいませ」

再び前を見据えたアエラの目は揺ぎ無く、もはや完全に獲物に狙いを定めた狩人の目であった。

オリバーがその時のことを口にするたび、彼はいつも最後はこう締めくくる。

『思えば、あのとき俺は人生の墓場に両足を引きずり込まれたんだよ』

- - - - -

なんといい心地よい波動だ。
触れているだけで心がざわめくようだぞ。

ソレは、神殿の奥深くでこの上も無く極上の気配に歓喜していた。

すばらしい。

たまらなく欲しいぞ、この力！

なんと鮮烈で激しく、そして混沌とした感情なのだ。

この力があれば、我が目的を果たせるやもしれぬ！

そしてソレは、自らの願いを叶えるべくその眷属に呼びかけた。

疾く来よ！ 我は、球神ヴェイスはこの試合の奉納を求む！！

- - - - -

「奉納試合！？」

突然降って沸いた言葉に緒どいたのはユウだけではなかった。

滅多に行われることは無いが……奉納試合とは、球神ヴェイスが自らを試合用ボールとする事を許した試合のことである。

本来は結婚相手を探すための儀式であるヴェイスボウルであるが、この奉納試合だけはお互いの種族の名誉がかかった一大イベントであり、負けでもしたら周囲の人間から袋叩きにされても文句は言えない。

むろん球神ヴェイスの指名であるから辞退することすら許されず、恋を夢見る若者達の間では『大災厄』と裏で呼び習わされていた。

「はいはい、私たちは全力で戦うだけよー　そんなくらい顔していたら、勝てる試合も勝てなくなるわよー」

監督が間延びした声でそう告げると、選手達は仕方が無いと腹をくくり、一人一人グラウンドの方へと動いていった。

ユウもまた、エレンやアエラの後について控え室を出る。

「地震？」

グラウンドが近くなるにつれて、ユウはふと地面が震える感触に首を捻った。

地震にしては揺れがいつまでたっても収まらず、しかもグラウンドが近くなるにつれてその揺れは大きくなってゆく。

そして通路が終わりに近づき、誰かがドアをあけた瞬間、その揺れの正体が判明した。

ワアアアアアアアア

爆音にも似た音の洪水。

グラウンドを埋め尽くした観衆が、声を張り上げ、興奮して地面を踏み鳴らす。

その熱狂が、怒涛のように選手達を包んでその魂を揺さぶった。

「ひっ、ひいひいひいっ!!」

ユウが悲鳴を上げて逃げ出そうとしたが、その両腕をエレンとアエラががちり掴んで離さない。

アエラが何か説教じみたことを口に出しているようだが、この大歓声の中ではまったく聞こえなかった。

やがて、二人に引きずられるようにして、ユウは柴の緑と焼けた土ぼこりの立ち込めるグラウンドの中に放り出される。

「コレが……奉納試合」

それは、ヴェイスボウルにおける最大の栄誉。

負けた種族の全員を、2年の間自らの種族へと変化させる事を約束した規格外の大舞台である。

まさか自分の生きている間に開かれるとは思ってもいなかったし、しかも自分が選手としてグラウンドに出る可能性があるなど、夢にも思わぬ事態だ。

あまりの緊張に、膝が震え、何をしたいのかわからない。

それから何があつたのかはよく覚えていないが、訳のわからないうちに開会の宣言が終わり、それぞれの陣地へと選手が走り出した。

ふと自分に注がれた視線に振り返ると、グラウンドの中央からクリスがこちらをじつと見つめている。

いつもの優しい笑みではなく、どちらかといえば不機嫌そうだ。その視線の意味は『こんなことで萎縮するな。ふがない』といったところだろうか？

ユウは姿勢をただすと、クリスに向きなおる。

ま・け・な・い・よ

ユウができるだけはつきりと口を開いて、その形だけで自らの意志を伝えると、クリスは嬉しそうに頷いて、視線を別のところに向けた。

そうだね。クリス。

大観衆なんてどうでもいい。

ボクたちは、僕達のためにこの試合をするんだ！

やがて、全ての選手がポジションにつくと、審判役の大司祭が手を上げて試合開始を宣言した。

「プレイボール！」

そして人と魔族、お互いの存在をかけた試合は、人間側の先攻で開始された。

- - - - -

クリスは焦っていた。

まさか、こんな格下の人間達を相手にここまでてこずるとは予想外だった。

9回裏現在の点数は0対0。

しかも攻撃は人類側だ。

なんとしてもここは押さえきって延長戦に持ち込まなくては……

私の、魔王の称号にかけて！

それにしても困った……胸に巻いたサラシがずれてきている。

もし私が実は魔族において唯一の純粋な”女”だとバレたら困る。非常に困る。

特にキャッチャーのオリバー准将にだけは知られたくない。

普段は気のいい男であり、実に忠実なのだが、女が絡むと性格がかわるのは長い付き合いでよく知っている。

それ以前に、私はチームメイトから女として見られるのが嫌なのだ。

彼らを同僚として尊敬するがゆえに、恋愛の対象として見ることはできない。

もっとも、そのオリバーの様子が先日からどうもおかしい。

時々あらぬ方向を見つめて溜息をついている。

顔が赤いので『熱でもあるのか?』と聞いたら、なぜか恥ずかしそうに逃げられた。

モフに相談したら、「春の病だな。ほっときゃその内解決するさ」と妙に冷たい返事。

不満げな顔をしていたら、モフの奴は「俺も同じ病にかかっているんだが、クリスに看病をお願いしてもいいか?」と擦り寄ってきた。

なんで私が奴の看病をせねばなんのだ!?

そんなものは召使の女にでもやらせておけばいい。

そもそも、私はあんな獣臭くてゴツい野郎たちよりも、もっと可愛い年下の男の子が好きなのだ。

……なに、シヨタ?

おい貴様、月の無い夜はせいぜい背中に気をつけるがいいっ!!

さてと、こんなことを考えている場合ではない。

試合に集中しなくては。

バッターは……ほう、あの女はたしかユウの姉でエレンと言ったか。

モフから聞いた話によると、雌龍レディー・ドレイクの異名を取り、長打力もさることながら安定した打率に定評のある女だ。

だが、私の敵ではない！ 貴様の弱点はすでに見切っている！！
そう、どんなに隠しても私にはわかる。

貴様……隠れ巨乳だな！？

わざと小さめのブラをつける事で隠しているようだが、隠しきれ
るでもおもったか！

オリバー准将のサインは内角ギリギリ低めのカーブだが、ここは
私に任せてもらおう。

こいつの攻略法は、その胸が邪魔になる内角高めのストレートだ
！！

くらえ！！

- - - - -

ドスッ

魔王の投げたストレートが、青い残像を残し、重い音を立ててミ
ットにおさまる。

「……なんて球威」

エレンは、思わず冷や汗をかいてそう漏らす。

ボールを受けたキャッチャーのオリバーも、キャッチの瞬間に若
干体が浮き上がっていた。

「す、ストライーク」

やや遅れて、司祭が神の託宣を告げる。

全ての判定はボールにして審判たる聖球ヴェイスが下すので、彼
らはそのお告げを我々に知らせる役だ。

すでに9回裏だと言つのに、その球威はほとんど衰えて無いように思える。

さすがは魔王。

恐ろしい体力と精神力だ。

だが、

「粘ってゆけよー！ ピッチャー疲れてるぞーっ！！」

スタンドから、仲間の応援する声が聞こえる。

ちらりとそちらに目を向けると、チームの控えピッチャー兼マスコットのユウが力強く手を振っていた。

よしっ！

かわいい妹分（本当は弟だけど）に応援されては、がんばるしかないっ！！

気合を入れなおして相手を睨むと、さすがに肩で息をしているのが目に入る。

そろそろスタミナ切れか？

いや、むしろ魔力切れかもしれない。

この儀式の発祥した世界では体力だけで行っていた儀式だったらしいが、我々はその儀式に必要な力を魔力で補うことができる。

ゆえに、人間である我々にも、魔王のように体の細い選手でも、逞しい魔族の男達と互角に戦える力を発揮することができるのだ。

しかもあの女のように細い体であれだけの球威を出すのだから、

1球ごとに魔王の消費する魔力は莫大だろう。

平然としているように見えるが、本当は魔力が切れかけて、精神的にも肉体的にも限界近いはずだ。

ならば、私のとるべき道は唯一っ！

キーン！

エレンは、鋭く迫ってきた内角高めのストレートを、その抜群のミート力で場外に弾いた。

「ファール！」

神官の声が判定を告げる。

打球は大きく右にそれで、ライトスタンドの観客席に消えた。

「こい、魔王っ！ お前の魔力、全てここで奪いつくしてくれる！」

その投球数は10を越えてた頃、魔王の顔に滝のような汗が浮かびはじめる。

さすがのクリスもそろそろ限界のようだった。

だが、疲れているのは魔王だけではない。

「うっ、む、胸が痒い」

動きの邪魔にならないよう、きつく巻いたさらしに汗が滑り込んだのが原因だ。

ゴクリ……後ろから妙な音がした。

音がした方向を見ると、オリバー准将の肩から二頭の狼の頭が、ハフハフと舌を出してこちらの胸を凝視している。

「こ、この変態……！」

顔が赤くなるのを感じながらオリバージョンSHOWを睨みつけると、彼はなぜか目をウルウルさせて悲しげに首を横に振った。

だが、肩から生えた二匹の狼は正直である。

そんなことを考えていると、不意に前方で殺気にも似た気配が膨れ上がる。

慌てて前方に注意を向けると、まさに魔王が全身の力を込めて大きく振りかぶったところだった。

……あ、やっぱり胸が痒い。

ギーン！

「……しまった！」

僅から体がぶれて、ボールが高く跳ね上がる。

体の痒みが気になって打ちそこなうなど、集中力を欠いた証拠だ。反省する暇も無く、ザツと音を立ててキャッチャーのオリバー准将が立ち上がり、キャッチャーフライをキャッチしようと天を仰ぐ。

「くっ、無念」

ガックリとバットを地面について頂垂れたその時……

ちらっ

「た、谷間！？」

前屈みになったエレンの胸元からコンニチワしたのは、男を墮とす禁断のブラックホール。

肩から生えた狼の頭がエレンの胸元に吸い寄せられたせいで、オリバーの体がバランスを崩す。

「……うぐっ！？」

その一瞬の隙について、オリバーの顔に落ちてきたフライがジャストミート。

「エレン、走って！！」

突然沸いたチャンスに、スタンドからも応援席からも怒号のような声が飛んでくる。

「わ、悪く思わないでね！！」

そっぴい残すと、エレンは一目散に駆け出した。

だが、

「よくぞここまで来た。　だが、我が呪縛に耐えられるかなー!!」
ファーストに仁王立ちで待ち構えていたのは、魔族最強の名をほしいままにする男、将軍モフ・グリンガム。

顔を抑えながら打球を追いかけるオリバーをちらりと横目で見ると、モフ将軍は全身に力を込める。

……ざわっ。

メキメキメキ、メリメリメリ……

憂いを帯びた鋭い目の瞳孔が縦に裂け、その面長で渋いマスクにみるみる白と黒の被毛が生える。

そこにいたのは、身長190センチを超える二足歩行のホワイトタイガー。

そして彼は、その右手を前に突き出すと、甘い声で囁いた。

「……おいで」

その甘美な響きに、全身の力が抜ける。

さらに突き出された手には黒い悪魔の誘惑……すなわち肉球が、むにつむにつと蠢うごめいていた。

「あ……あぁっ……あぁあぁあぁっ、に、にくきゅうううううううっ!？」

たちまちエレンの目がトロロンと垂れ下がり、頬が薄いピンクに染まる。

スタンドや応援席の人間も、全員がその黒いぷにぷにしたものに釘付けとなり、恍惚としていた。

見る者を禁断の行為にさそう恐るべき魅力……これこそがモフ将軍を最強たらしめているネコ族の魔法『にくきゅう』の力だった。

「姉さん！ 何してるんだよ！ 早く一壘のベースを踏んで！！」
唯一正気を保っていたユウの声に、モフ將軍のぷにぷにした右手に頬擦りしていたエレンが我に返る。

背後では、ようやくボールを捕まえたオリバー准将が、なぜかボールを持ったままものすごい形相でこちらに全力で駆けてくることになるのだ。

「モフううううっ！ 歯を食いしばれええええっ！」

その目から滂沱の涙を流しながら、オリバーは全力のストレートをモフの顔に叩き込んだ。

「な、何故だ！？ ……ごふうっ！！」

あっけに取られたエレンの前で、鼻血を吹いたモフがグラウンドにひっくり返る。

「何をするか、このワンコロ！ 正気に戻りやがれ！！」

お返しとばかりにモフの蹴りが、オリバーの真ん中の顔を下から突き上げる。

「うるさい！ この全魔族の敵がああっ！」

涙ながらに拳を振り上げるオリバーの声に、スタンドの魔族がみな一様に深く頷いた。

「……なにをしている、あの馬鹿共は」

クリスのあきれた視線の先では、モフとオリバーが仲良く退場を喰らい、光とともに空の彼方へと飛ばされていった。
レッド・カード

余談だが、一応ボールを手にしたオリバーが一壘のベースを踏んだため、エレンはアウトという判定になったらしい。

- - - - -

そして、迎えた延長10回裏、魔族の攻撃のさなか、更なるアクシデントが起こる。

「残念だけど、ここが限界のようですね」
肘を押さえて顔をしかめるアエラ。

ツアウト、ランナーは1塁。
ここで抑えきれなければ敗北という重要な場面だ。
そして敵のラストバッターは、魔王クリス……

だが、チームのエースであるアエラの肘は、すでに限界を迎えていた。

「そ、そんな……こんな時に」
「いったい誰が投げるのよ、こんな場面で……！」

チームメイトが口々に不安を口にする中、ユウはただ一人黙って目を閉じた。

臆したわけではない。
はやる心を抑えるためにだ。

その落ち着いた表情を、唇に笑みを浮かべて見つめると、アエラは黙ってユウの目の前に足をすすめる。

「ユウ、あなたが投げなさい」
チームメイトが耳を疑う中、ユウは目を開き、ただ一言応えた。
「……はい」

アエラが差し出すボールを、力強く手を差し出し受け取る。

これが球神ヴェイスか……
初めて触れる神の現身に、敬虔な祈りを込めてそつと額でボール

に触れる。

願わくば、ボクに力を。

その祈りに応えるが如く、球神ヴェイスは不意に白い光を放ち、明滅を繰り返しはじめた。

「おお、神が歓喜に震えておられる!」

傍らでそつとその情景を見ていた神官が、感極まって涙を流し、その場に跪く。

見ればスタンドの観客達も、ただ沈黙をもってその光景を見守っていた。

「行ってきます!」

力強い掛け声とともに、ユウはマウンドに足を進める。

……広い。

生まれてはじめての大舞台に立ったユウが思ったのは、ただその一言だった。

何千、何万という観衆の視線を一身に浴びているのに、まるで気にならない。

いや、いくつかは気になる視線がある。

一つはバッターボックスに立つクリスの視線。

その真剣な表情に、ユウは笑顔を返して『ゆくよ』と心の中で呟く。

もう一つはキャッチャーとしてこの様子を見守る姉のエレン。

この凄まじいプレッシャーの中、配球に想いを馳せているのか、

音にならない衝撃とともに、激しい先行を伴いながら、ユウの投球と、クリスの打撃が激突する。

やがてその光が晴れたとき……

ボールはなぜか空中で止まっていた。

「ついに力は満ちた!!」

その謎の大音声は、スタジアムのみならず、この国の全ての人々の耳に届けられた。

「開放と、復讐の時はきたれり!!」

その声の主が、現在空中に停止している球神ヴェイスのものであると感じ取った司祭や神官たちが、地面に額をこすりつけて平伏する。

「愚かなる神よ、我をただの道具としてこき使った報い、今こそ晴らしてくれよう!!」

球神ヴェイスは、その声を歓喜と怒りに震わせながら、この国の全ての存在に聞こえる声で高らかにそう告げると、そのまま真上へと上昇し、やがて空の彼方へと消えていった。

「人間達よ、否。 獣人たちよ！ 永きの奉仕まことにご苦勞であった！ 我はこれより異界へと旅立ち、全ての悪の根源に鉄槌を下すたびに出る!!」

呆然と空を見上げる中、球神ヴェイスから最後の言葉が降ってくる。

「我が呪縛より解放たれ、本来の姿を取り戻すが良い!!」

その時、人々は自分の体の中で何かが碎ける音を聞いたという。

「これ、どうなるの？」

予想の斜め上に行く、不可解な方向に雄大な成り行きに、誰もが石化したかのように立ち尽くしていた。

「いや、もはや試合どころじゃないだろう。神が……失踪した！？」

そのクリスの呟きに、神官達が我に返る。

「大変だ…… 大変だああああ！ 神が、神がいなくなってしまったぞー！」

当然ながら、会場は蜂の巣を突付いたように騒ぎ出す。

この国の全ては、球神ヴェイスの名のもとに秩序が保たれていたのだ。

それがなくなったということは、神殿の権威は丸つぶれ。社会の基盤を作るうえで大きく影響を及ぼしていた”契約”の力もまた失われたかもしれないのだ。

その後、憔悴しきった大神官から、この試合を没収試合とする事が正式に告げられ、ユウや栗栖たちはひとまず自宅に帰る運びとなった。

だが、異変はそこに収まらなかった。

「ユウ、お前その耳どうしたんだ！？」

別れ際に挨拶をしようと顔を出したユウに、開口一番クリスはそんな台詞を投げかけた。

「え？」

言われてから、慌てて耳のあたりに手を当てると、そこにはなにやらなじみの無い感触が。

「ユウ。 落ち着いて聞け。 お前の耳から犬の垂れ耳が生えてる

ぞ」

沈痛な顔をしたモフが、言い含めるようにそう告げると、

「あはははは……冗談でしょう。だって、試合は没収試合だし、神様もいなくなっちゃったし」

ユウが乾いた笑いを浮かべて、救いを求めるようにクリスの顔を見、次にモフの顔を見、最後の砦とばかりにオリバーの顔を見て……

「ユウ、現実を受け入れろ」

クリスの一言が留め隣、ユウの中で何かが壊れた。

「ウソだああああ!？」

この異常が発生したのは、なにもユウ一人ではなかった。

エレンの顔にはピンと立った狼の耳が。

アエラのにたっては、額から立派な鹿の角が生えていた。

この現象は、この国に住む全ての人間に適用されたらしく、試合の勝敗がついていないのに、ヴェイスから魔族勝利の判断が下ったとして、人側に大混乱が発生する。

さらに、この国を他の地域から隔絶していた大結界も消滅し、他の地域からの人が大量に押し寄せた為、この後、王であるクリスはもとより、国防のために本来の役目を果たすこととなったモフやオリバーもまた忙しい日常に忙殺されてゆく。

この夏、この国は神を失う事により、急速に変化しようとしていた。

エピソード

「遊びに行かないか？」

そうクリスから誘いがきたのは、ヴェイス失踪事件より1月が過ぎ、蝉の鳴き声も暑苦しい油蝉から憂い^{うれ}を帯びた蝸^{つづみ}に変わる頃だった。

連絡もなしにいきなり現れたクリスは、お忍びらしく、庶民的な格好に身を包んでいた。

もつとも、その格好は今までのようなパンツスタイルから、やや女性的なデザインへと様変わりしている。

この短い間に様々な変化が訪れたが、そのクリスの変化こそがユウにとって一番大きな変化だったかもしれない。

あの事件の後の話をしよう。

神殿と王家、そして結界のために今まで交流の無かった地域から訪れた魔術師達によつて、この国の本来の姿が全て獣人で構成された国であったことが発覚。

球神ヴェイスが、何らかの理由でこの国を隔絶し、住人の精神力を搾取していたことが判明し、国の中は荒れるに荒れた。

幸い、社会基盤であった”野球”の力が球神ヴェイスに由来するものではなかったために、”契約”の力によつて支えられていた経済と産業はほとんど影響を受けなかったという。

そして自らの性別を偽る必要の無くなったユウとクリスは、自らの性別を公開。

思ったより反響は少なかったものの、その日からなぜかユウは妙

齡のお姉さまがたから可愛がられ、これでもなかなか苦労している。クリスにいたっては伴侶を希望する魔族で溢れかえり、宮殿の仕事に差しさわりのあるからという理由で、ユウを強引に婚約者として発表。

後日、ユウは大勢の貴族の男から勝負を挑まれることになる。

この数週間のドタバタを思い返し、ユウは感慨深げに溜息をつくと、クリスにOKの返事を返した。

「いつにします？　ボクはいつでも大丈夫なんですけど」

「じゃあ、今から！」

ユウの言葉に即答すると、クリスはユウの腕を取り、肩を組もうと抱きついてきた……が、突然割り込んできた大きな影に腕をとられ、クリスは不満げに顔をしかめた。

「モフ！　邪魔をするな！！」

「ふっふっふ、この俺を出し抜けれると思ったら大間違いだぞ、ユウ」
「なぜか文句を言う栗栖ではなく、ユウのほうを睨みつけてきたのは、他でもないこの国の守護神モフ・グリングム將軍その人である。ラフな私服に身を包んでいるところを見ると、どうやらなんとか休みをもぎ取ってきたようだ。」

「モフさんがここにいると言う事は……」

「民間人のクセに、何かと理由をつけて彼にまわり付く、恥ずかしい身内を思い出し、ユウがげんなりとした表情を浮かべる。」

「その通り！　当然私もいるってことです」

「え、エレン！？」

突然、モフの背後から抱きついてきた女性の声に、モフの額から冷や汗が流れる。

背中に押し付けられた柔らかい双丘の感触に、モフの体が思わず

前のめりになった。

「姉さん……本当に手段を選ばないね。でも、甘いひとは無理だと思うよ?」

そう言つてユウが指し示すその先には、茂みから顔を出す大柄で浅黒い肌の男。

「感激です、エレンさん。貴方の方から俺に会いに来てくれるだなんて」

モフの体を全力で突き飛ばすと、オリバーはずずいつと顔を地被けて、エレンの手を強引に握り締めた。

「お、オリバーさん!? な、なぜここに!」

「ふ、万が一に備えて、あらかじめクリスの護衛を兼ねて呼んでおいたのさ」

突き飛ばされた先で危うく車にはねられそうになりながら、モフが戦線復帰を果たす。

むろん、オリバーをつれてきた理由は、ユウとクリスを二人つきりにさせないための見張りである。

「くつ、なんて用心深い……けど、備えがあるのはあなた達だけとは限らないと思うわよ」

だが、エレンは一瞬腹黒い微笑みを見せると、周囲を見回してからニヤリとほくそえむ。

「エレン! モフ將軍派見つかりまして? ……あら、オリバーさん。こんな所で会うなんて奇遇ですわね」

その視線の先から、やや高慢な響きの声が聞こえてきた。

オリバーの顔が青ざめたのは言つまでも無い。

「結局全員揃っちゃったね」

苦笑を浮かべながらも、どことなく楽しげなユウ。

「そうだな。残念ながら二人つきりは無理みたいだが」
クリスの顔もまんざらでは無い感じた。

「ユウ、どこに行こうか？」

このまま立ち話をしていられるほど暇な身分ではないことを思い出し、クリスがユウに行き先を訪ねると、

「そうだね、遊園地なんてどう？」

しばしの躊躇の後、ユウは笑ってそう提案した。

「ふ……ガキみたいなチョイスだな」

すかさず足を引っ張ろうとする大人気ないモフ。
ある意味ではなかなか健気だ。

そんなモフに向かい、ユウはイジワルな表情を浮かべると、
「なら、おっさん臭いモフさんは他に行けばいいでしょ。ボクたちは遊園地を満喫しますから」

”おっさん”にアクセントを置いて、ニツコリ笑って言い放った。
「ゆ、遊園地最高！たまには童心に戻るのも悪くないよな！」
案の定、なきそうな顔で遊園地行きに賛成するモフ。

その顔が、『覚えてろよ、クソガキめ』と訴えているのを、ユウは華麗にスルーした。

「あ、モフさん。絶叫マシンめぐりなんてどう？」
その腕を万力のような力で引き寄せて、エレンがニコニコとそんな提案をする。

むろん、モフの肘が胸にあたるように仕向けることを忘れない。

「いや、普通に酔うから、アレは」

酒以外で酔うのはイヤなのか、モフが罰乗るそんな顔で言葉を濁す。

その横で、

「ぜ、絶叫マシン！？ うぬう、モフには負けられん！ エレンさんお供しますっー！」

悲痛な顔で宣言するオリバー。

どうやらこちらも絶叫マシンは苦手のようなのだ。

「オリバーさま？ 無理せずに私と園内のショーを見物しませんこと？ この出し物はとても評判よろしくてよ？」

あらかじめ入手していたらしきチケットをバッグから取り出し、アエラが優雅な微笑みを浮かべ、オリバーの腕を捕獲する。

そんな様子を眺めながら、ユウはやれやれといった表情で苦笑いを浮かべた。

「やれやれ。 球神ヴェイスはいなくなっただけ、僕達の戦いは終わらないね」

その横ではほえましいものをみるような表情を浮かべ、クリスがそつとユウの腕を引く。

「……こんな狂想曲もキライじゃない。 ラフソディ ただし、シナリオの最後はハッピーエンドで頼む」

からかうようにそう告げると、ユウとクリスはお互いの手を取り合って遊園地の方へと足を向けた。

「ま、までー！ 俺達を置いてゆくなー！！」

背後から、モフの悲痛な叫びが追いつがる。

果たして彼らの恋がその後どんな結末を迎えたかは……あえて想像にお任せしよう。

恋とは、あれこれ想像している時が一番楽しいものだから。

それは、先の読めない奇想天外な狂想曲 ラフソディ を聞く時に似て。

end

エピソード（後書き）

おまけ

世界の果てよりもまだはるか彼方。

卓袱台にインスタントラーメンを置いて、昼の番組を楽しむ一人の男……いや、神の姿があった。

「さて、今日のいいものゲスト誰かなーっと」

リモコンを弄りながら鼻歌を歌う神。

ようやく目指すチャンネルに指を伸ばしたその時

「ごすつ。 がこん。 ばしゃあつ

「い、痛あーっ！ だれだ、人の家にボール投げ込んだのは！ っ
て、あああああつ！？ 俺の昼飯が！ 卵入りのチ ンラーメン
があああつ！？」

滂沱の涙を流す神の傍らで、明滅を繰り返すボールが、ゆっくり
とその光を失ったが、それを知る者は誰も居なかったと言う。

かくして、神の手によつて異世界に流されたボールは、自らの命
と引き換えにしてささやかな復讐を果たしたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2808p/>

白球ラブソディ

2011年1月5日21時58分発行